

咲の世界にジョセフの
ようなキャラクターを
オリ主として登場させ
てみた

無諳☒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よお!!?

俺の名前は星条承悟（ほしじょう じょうご）だ！

皆からは

ジヨジヨって呼ばれてるぜ!!?

まあ自己紹介はこのぐらいにしてく……

早速この物語のあらすじを簡単に説明するぜ!!?

この物語は、大学3年で就職活動をしていた途中でトラックに跳ねられて死んでしまった俺こと、星条承悟が咲の世界に転生してその世界の人達と出会い、熱い麻雀バトルを繰り広げるって事になってるぜ！

まあタグについてるシリアスだったり恋愛だったりの表示は、正直この物語を描く作

者の度量次第だがな？

まつ、気になるって奴は1回見て確かめてみるのもよしだし、気にいらなかったらそれもそれで良い。

んじやあまつ、あらすじはこれぐらいにして、物語が始まるぜ!!？

※一応作者も麻雀はしますが、役や計算が曖昧な所があります。それでも大丈夫な方は、そのまま物語をお楽しみ下さい。

目次

プロローグだぜ！	1	件をクリアしたらだぜ!!？	67
鶴賀学園編		自業自得……	
1話	太陽のような笑	6話	
顔の人	14	後悔……それを癒すのは……	80
2話	R—15	7話	冗談から出
初めての味	24	た真	93
3話	オンラインで対局！	8話	R—15
4話	その気持ちは痛いほど分	9話	ジョ、入部を決意する！
5話	入部するのはこの条	10話	尊敬される臆病
		11話	依存しているのか
		12話	な……
		13話	ふざけんじゃ
		14話	ねえ!!？
		15話	150

1 2 話

迷惑なんかじゃ

あねえ!!?

168

1 3 話

R | 1 5

東横とのデート |

183

1 4 話 ありふれたこの時間が……

196

プロローグだぜ!

大学3年生の冬……俺は就職活動のために県外を渡り歩いていったんだ。

企業さんのインターンシップや、中には選考会の予定もあった。特に3月は忙しくて、俺としちや大学のゼミのテーマを考えてる余裕なんて無かったな!!? いやあ

くまずいまずい……

とまあ、んな事を考えながら歩いてるせいかな、俺はトラックに跳ねられちゃった。

まあ? 横断歩道はちゃんと確認したんだが……どうやら居眠り運転だったらしい。

全く……これから社会に出て立派に働いて、それで……

(親にもちゃんと親孝行しなきゃいけないのになあ……)

段々意識も無くなって、視界も暗くなりやがった。チクショー……俺の人生もここま
でか……

なあーんて思ってたんだがな……なんかいきなり視界が明るくなって、それで神様っ

ていう存在も現れたりと……正直場の流れについてこれなかったんだが……その後落ち着いて話を聞いたら、どうやら俺は間違えて死んでしまったらしい。

それで神様も泣いて詫びてくるわけだ。正直親に何もできなかった事は残念だが、なつてしまった事は仕方がねえ。それに、人である俺にこんな頭下げて謝ってくれてんだ。許さない方が鬼だろ？

だから俺は許したんだ。そしたらあちらさんが、俺が死んだでしまった代わりに違う世界に転生させてくれるつ言つてきた。転生先はランダムだから、それについては決定権がないが、特典は自由に決められるつてよ。

でもいきなり特典つて言われてもなあ……

と思つてたら、最近丁度ジョジョの漫画にハマつてたから、俺は神様にジョジョの世界で使われる能力が欲しいと頼んだ。まあこう答えた理由としては、こつちからすれば転生先なんてランダムで明かされねえし、それにもそもその世界が平和だったら、例えばスタンド能力もらつても宝の持ち腐れだしな。

ん？ ジョジョの世界で使われる能力は全部平和寄りじゃないつてえ？

んなもん仕方ねえじゃねえか！

神様だつて色々忙しそうだし、俺ばかり

にかまけてる訳にはいかねえだろう？

だからさつさと答えようと思つて考え

たら、思い浮かんだのがそれしか無かつたんだよ！

だから問題ナツシン!!？

そつからは想像通り、足元に俺が普通に落ちるような穴が空いて自由落下するしながらの転生……

つておもつたら、実際にはその場がもんの凄く光って目すら開けられなかったわけよ

！ まあ結果としちゃあ……

(この神様すつげえ優しかつたんだなあ……)

と思いつながら転生しましたとき。

そんでえ、無事に違う世界に転生したわけだけど……窓から見える景色を見たら、自然豊かでのどかな場所……この一言に限る。いやあ……やっぱりスタンド能力とか言わなくて良かったぜ！
だが……そしたら俺が貰った能力はなんだ？

別にここは戦争とか変ないざこざとか起こらなそうだし、俺自身平和な世界で暮らしてきたから戦いなんてまっぴらごめんだ。

とそんな事を考えていて、不意に窓とは真逆の方を向いたら、そこには大人1人は余裕で入る大きな鏡があった。そしてそこには赤ん坊の姿も映っていたが、多分俺だろう。そしてもう1つ映ったものがある。それは……

バチバチ……

(えっ?)

これって……波紋?)

なんと俺は波紋使いとしてこの世界に転生していた。

それから4年後……

どもお……大学生A改めまして星条承悟でえす！

ん？ 時間すつ飛ばし過ぎだつてえ？

ならお前らは、好きでもな
俺は自

い赤ん坊の、しかも性別男の成長を長つたらしく見守りたいのか？

分の子や親戚の子じゃねえと無理だな!!？ お宅らもそういう口だろ？

だから時間すつ飛ばしてもなんも問題ねえな！ はいこの話は以上！

で、今なにやってるかって言ったら、俺含めた家族4人で麻雀してまーす！

俺前世で麻雀やった事ないけど、これって案外楽しいもんだな!!?

ああ、そうそう。因みに俺に宿った波紋だが、今では意識のオンオフで波紋を扱えるようになったぜ!

いやあ、赤ん坊の頃から意識して波紋法の呼吸をしてきたけど、練習した甲斐があつたわ。

まあ家族に波紋なんて見せる訳にもいかねえから、家族のいる前では普通に呼吸してるけど、それ以外は外で色々試してる。そのおかげもあつて、外を元氣一杯に駆けずり回つてもそんなに疲れはしねえ。

つと、色々と考えているうちにいつの間にか俺の最後の待牌が来たぜ!!?

「ツモ!　りゅうーいーそー!」

「あら!?　承くん4歳なのにもう役が分かるのねえ!　賢い子だわ!!」

「?」

この人が、この世界で俺を産んでくれた母さんだ。一応プロ麻雀師らしい。

「また承悟が上がりか。ははっ、これは参ったなあ」

んでこつちが俺の父さん。仕事は、ここから遠くに離れた会社で働いている。

「後少しでいいのができたのに」

最後に俺の兄ちゃん。俺とは3つ歳が離れてるから7歳で小1だ。まあその歳で麻雀打てるのもすごいよなあ。俺が言えた義理じゃないけど……

まあそうやって楽しく生活してたって訳よ！

前世の親には悪いが、俺はこっ

ちで幸せに暮らしてるぜ！

だから、俺がいなくても元気に暮らしてほしいな。

そう思いながら俺は、今の家族で幸せに生活してたんだ。

あの時まで……

2年後……

俺は小学1年になった。
入学式も既に終わって、既に夏……自然のどかなこの地でも
暑く感じちまう。

まあそれはそれとして……最近家族の様子が可笑しい。前まで楽しく麻雀を打ってた筈なんだが……今では俺の事を恐がって見てるように見えた。俺はただ、普通に楽しく麻雀を打ってたし、親も喜んでくれていた。でも、それも日に日に笑顔とか笑いとかが消え失せて、いつの間にか無言で麻雀をやるようになってしまった。

確かに……小さい頃から連続で上がり続けたつてもあるんだろうし、それも確率として役満も多かった。だからあんなに俺の事が怖く見えてしまったのか？

(まあ今日聞いてみるか。それで俺の思った事が正しければ直せばいいだけだし……) 　　それで目の前に我が家が見えた。いつものように、正面のドアから家に入る。

「ただいまあー」

……シーン

いつものこの時間帯なら、お母さんがある筈で、ちゃんとお帰りって言ってくれていた。なのにそれが今日は返事が返ってこない。お手洗いにも行ってんのかな？

まあそれだったら気にする必要ねえし、いつも通り居間を通って自分の部屋に戻りますかねえ……

そう思いながら居間を通った時だった。居間のテーブルの上には、手紙と……

(これって通帳じゃねえか？)

いつもならこんな所に置いてねえのに……元あつ

た場所に戻しとくか)

そんでいつも母さんが通帳を入れてある所に戻そうとしたとき、通帳と一緒に置かれていた手紙に目が止まった。それで俺は……それを読んじまったんだ。
そこに書いていた内容が……

俺という存在が恐ろしく見えてしまった。自分の子なのに、俺を見るたびに心の中に恐怖が湧き出る。だからここを離れる。

簡潔に言えばそう書いてあつた。そんで結論からすれば、俺以外この家から家族はいなくなつた。毎月俺が生活出来る分のお金は支払われるらしいが……そんなの……そんな事……

「うっ……ぐっ……うわあああ……!!？」

また俺は……家族を失っちゃったんだ。お金の事なんて……そんな時はどうでも良かったんだよ……

鶴賀学園編

1話

太陽のような笑顔の人

s
i
d
e

???

私は……小さい頃からとても影が薄くて、相手の事を呼んでもなかなか気付いてもらえなかった。そして、遂には目の前で歌ったり踊ったりしななければ相手に気付いてもらえなくなった。

そして私の事を産んでくれた両親にまで認知されにくくなってしまつて、コミュニケーションも無くなつてしまつた。人は必要な事と不必要な事を天秤に掛けて、不必要な物は切り捨てるという事をする。

そして私も、いつの日からかコミュニケーションは捨てた。それは家族との間でも例外ではない。

そして今日は、春真つ盛りで満開の桜が、高校に新入生として入つて来た私達を出迎えてくれたつす。入学式の日が桜で満開なのは、正直言つて嬉しいつす。でも……

(それでも私の事に気付いてくれる人なんて……この世界にはいない)

体育館で入学式があつた後、クラスが振り分けられている紙を見た。私は1年A組で、その教室に入った後は自分の名前が書かれた机に向かう。私は1年A組

名前は認知されているのに、“私”という存在は認知されない……

(でもこれもいつも通りつす。期待なんてハナからしてないつす)

そう頬杖をかいて窓を眺めていた時つす。

「ええつと……俺の席は……おつ！」

あつたあつた！

ここだな」

そんな声が入つて来たつす。その声を発した人物の足音が近づいてくる。そし

てその足音は、私の丁度隣の席で止まった。どうやら私の隣の席らしいです。まあそんなのどうでもいいです。

「隣の席は……おっ！」

ラッキー!!?

女子じゃねえか!!?

はいはい良かったつすね隣の女子で……私も女子なのに……

「なあ、あんたの名前なんつてんだ？」

早速女子に話しかけるとか、コミュニケーション能力凄いですね。私は同性からも声かけられないのに……

「おいおい、聞いてんのか？」

はあ……隣のうるさいです。これは席運がなかったつすね。それよりも隣の女子、早くその人に返事してほしいです。

「なあー！」

羨ましい……こんなに声をかけてくれてるのに……何で答えないつすか？

「なあつて！」

「……えつ？」

その時、私の肩が誰かにトントンつてリズムよく叩かれたつす。気のせいだと思つて無視したら、またトントンつてされたつす。

(わ、私の事を認識しているつすか!!?)

9割恐る恐る、でも1割は期待して叩かれた肩の方を向いたつす。すると……

「よお！」

やっと気付いてくれたんだなあ。俺初っ端から女の子に嫌われたと

思つて落ち込むところだったぜ！」

そんな事を言いながらその人の顔は笑っていた。その笑っている顔がまるで……辺りが真つ暗でも一瞬で照らせるような、そんな優しい光を持った太陽に見えたつす。そう思つたと同時に……

「そんじや自己紹介な！」

俺は星条承悟つてんだ！

好きなように呼んでく

れ!!?」

「わ、私は東横……東横桃子つていうつす！」

(この人の顔を……もっと見ていたいつす！)

そんな感情が、いつの間にか私の心に芽生えていたつす。

よお皆！

元気でやってたか!!？

そうか、それなら良かった!!？

ん？

何でお前はあんなことあったのに平気そうな顔してるかだつて？

……確かに最初のうちは辛かったよ。いきなり俺の目の前から家族がいなくなるのか……もしかしたら前世の親もこんな気持ちだったんだらうな。多分俺が小さい頃に、俺がいなくても幸せに暮らしてほしいって思ったから、それに対して多分バチが当たったんだらうな。

今はそんな風に思ってる。別に独り暮らしが苦つて訳じゃねえよ？

何たつ

て俺……元大学生Aだけ？

そうそう、某有名企業の a p o l e の頭文字な！

そんな事はさておきだ！ 独り暮らしを元からやっていた俺が、今更身体が小

さくなつたくらいで苦になるわけないだろ！

(それでも……心にポツカリと穴は空いちまったがな……)

家には、未だに麻雀の自動卓がある。今の俺の現状を作った原因……元は俺なんだが、それでもこの卓には俺の幸せだった思い出が詰まつてる。だから、捨てれない……いや、捨てるわけがねえんだ！

でも結局1人しかいない家で1人で打つのは退屈だ。だから小学生高学年になった頃から、自宅にパソコンを設置した。そんなもつて、ネットワークで対戦できる麻雀をし始めたんだ。

そんなこれがまあ面白くてハマつちまった！ 心の穴はそれで塞ぐ事はできなくても、それでも楽しいと思える場だ。それに中には強い奴もいるしな！ 打つてて面白い。

そんなこんなで日が過ぎて、今日は高校の入学式だ。高校の名前は鶴賀学園つて所で、ここ3、4年前から共学化した。なんでも過疎化が進んで、共学化しないとやつてられないつて事らしいぜ？

それで校長の長い話が終わつて振り分けられてる教室に着き、そこめ自分の机を確認する。そこまでいって席につき……

「隣の席は……」

不意に隣の席を確認した時だ。確認した限り、女子の制服だった。そこで気も緩んでいたためか……

「おっ！

ラッキー！

女子じゃねえか!!？」

隣の席に聞こえるぐらいの声で言っちゃまった。絶対に聞かれてるし、これで俺の事嫌いになっちゃったかなあ……いや、でも取り敢えず自己紹介はしときたい!!？」

だから俺は隣の女の子に名前を尋ねたんだ。でも反応なし。諦めずにまた声をかける。またもや同じ無反応……今度は強めに呼びかけて見る……結果惨敗……。

嫌われちゃまったかなあ……と本当に思いながらも、最後の手段として相手の肩を叩いてみる。これで反応が無かったら試合する前に不正がバレて失格……てな感じかな。

でも反応して欲しいと一縷の望みを持ってその子の肩を優しく叩いた。すると、ビクッって反応したんだ。まるで怯えている小動物が、背後から何者かに触れられたように……

まあともかく気付いてくれそうだったんで、俺はまた肩を優しく叩いた。すると、女の子の方もやっのだが、俺の方にゆっくりと顔を向けてくれたんだ。

「よし！　ファーストコンタクトはなんとかなったな！

いやあ……入学

初日から女の子に嫌われるってのは……なかなか堪えるからな。それも隣だし……」

だが、どこか妙に感じた。なんでそう感じたか？ 相手の目が見開いていたから。まるで何かに驚いてるかのよう……

(ただ目を見るだけだが……なんでこんなに驚いているんだ？ 知り合いつて訳でもないし、俺の記憶の中にもいない)

まあそれを考えるのは後回しにして……

「よお！ やつと気付いてくれたんだなあ。俺初っ端から女の子に嫌われたと思つて落ち込む所だったぜ！」

今は自己紹介だな。……怒ってないと良いんだが……

「そんじや自己紹介な！ 俺は星条承悟つてんだ！ 好きなようにに呼んでくれ!!？」

「わ、私は東横……東横桃子つていうっす！」

それでその女の子は、やつと返事を返してくれたんだ。それも俺の予想以上の元気で明るい声ととびきりの笑顔で……

まあそんな顔を見ちまったから……

「……すげえ別嬪さんだ」

「べっ!!？」

またつい口から言葉が出ちまった。そのせいか東横の顔が赤くなってる。

(これは怒らせちゃったか?)

いや、なんとか誤魔化さないと!!?)

「いやあ……横から見たら髪で顔が隠れて……そんでやつと振り向いて返事をしてくれたと思ったら、東横の顔がが凄く綺麗で可愛かったから……つい口で言っちゃまって……」

「き、きききききき!!?」

か、かかかわつ!!?」

俺が言った発言で、ますます東横の顔が赤くなつていった。耳まで最終的に赤くなつて、今にでも顔から蒸気が出そうな、そんな雰囲気だった。つて……

(これってさつきと何も変わってねえじゃねえかあ!!?)
寧ろ詳細に言っちゃまってるし!!?)

頭の中でどうしようと慌てふためいている時、不意に俺の手が誰かの両手で握られていた。柔らかくてスベスベとしたその手は……東横の手だった。

「私……私そんな事言われたの! 星条くんが初めてつす!!? とても嬉しいつす!!?」

あり?

これって怒ってるんじゃないかって、逆に喜んでる?

とまあそんなこんなで、俺の第2とも言える高校生活がスタートした訳なんだよな。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e

↓

2話

R | 15

初めての味

入学式初日……俺は高校生になって初めての友人ができた。それも席が隣で、これまでたどえらい別嬪さんなんだよなあ……

(というより俺のストライクゾーンど真ん中じゃねえか!!?)

あれから話していると、東横の事について段々と分かってきたんだ。俺が最初に声をかけた時に驚いていたのは、昔から自分の影が薄過ぎて認知されず、目の前で歌ったり踊ったりをしなければ相手に気付いて貰えなかったんだとか。

そこで挙げ句の果てに両親にも認知されにくくなって、そのためか相手とのコミュニケーションも取らなくなっただと。

そんな事を聞いた。それを聞いた時俺は、場違いな質問をしたと思ったんだ。ああ、今はもう最初のHRとか終わってるから、もう家に帰っても良い時間になってる。

でも俺からすれば、こんなに早くに帰ってもやる事がない。だから隣の席の東横と面と向かって会話してる。まあ東横以外にも友達はできたはできたが……そいつらもどうやら東横の事が見えていないらしい。目の前に本人がいるのに、さもそこには俺以外誰もいないという風に見えるようだ。

東横は……いつもの事だと言って気にしてないアピールをしてきた訳だが……言葉で言っても顔には本音が出てて丸わかりだ。

(つたく、そんなこと言うんだったらもつとポーカーフェイスも上手くなるんだな!!?)

まあそんな事がどうにも気に入らなかつたんで、俺つちはその場で誰にも気付かれずにある事したわけよ！
その結果どうなつたかだつてえ？
そんな

の……

「えっ!!？」

なんで目の前にこんなに可愛い子が!!？」

「嘘!!？」

全然気付かなかった!!？」

「クソッ！」

なんでよりもやってジョジョの隣の席なんだよ!!？」

「おい最後の奴!!？」

テメエは後で全力でぶん殴ってやつから覚悟しとけ

!!？」

「げえ!!？」

ヤッバイ聞かれてた!!？」

俺はクールに去る（逃げる）

ぜ!!？」

「それカツコ良くねえだろ!!？」

「クスクス……」

そんな芝居じみた事をやってつと、東横がクスクスと笑っていた。本当ならば、もつと色々な話とか表情とか彼女はできるはずなのに……本人が持つその体質故か他の人との繋がりを諦めちまつてる……

今回の事だつて……俺が皆に気付かれずにあの能力を使ったから、周囲には東横が認識できるわけで……俺がこの能力を切ったら東横は皆の前から忽然と姿を消したように見えちまうんだろうな。

とまあそんな事を考えていたらよ……俺の肩がトントントンって叩かれたんだ。そつち

に顔を向けると、東横がこつちに笑みを浮かべてたんだ。それで俺がどうしたって聞いたら……

「もうそろそろ良いつすよ。皆に私の姿が見えてるのつて……星条くんが何かしてるだからつすよね？」

「……やっぱバレちまうか？」

「バレバレつすよ。皆が星条くんに私の姿が見えないつて言つて、それを私が気にしてないつて言つたら星条くん……悔しそうな顔してたつすから」

「……いらねえ氣遣いだつたかな……」

それで俺はこう思つちまつた。俺は、東横に同情したからそうしちまつたんだろ。かつて……。彼女の事を見て欲しい、無視しないで欲しい……そんなものも俺の中にはあつたんだろが……

(これ……どう見たつて同情にしか見えねえよな……悪い事しちまつたな)

そう思つて俺は、すぐに謝ろうとしたんだ。それで俺が口を開くその前に……

「ホントに、いらねえ氣遣いつすねえ」

謝る前に彼女からそう言われちまつた。まあ悪態つかれてもこれは仕方ねえな……何せ今回の事は、俺が考えなしに行なつた結果だ。だから後から散々文句を言われよう。

(だが……何故そんな悪態をつきながらも顔が笑ってるんだ？
この顔で怒ってるのか？)

ま、まさか

と内心焦っている、また彼女の口から言葉が発せられたんだ。

「でも……星条くんは私の事を思ってやってくれたんすよね？」

なら……私はそ

の事が嬉しいっす」

「東横……」

「それにこの顔……星条くんにはしか見えて欲しくないっす。だから、もう何もしなくて大丈夫っすよ？」

「そうか。なら……」

俺は皆が明後日の方向に向いている隙について能力を解除した。すると皆の前からいきなり東横の姿が消えたように見えて……

「あれっ？　東横さんどこ行ったんだ？」

「ん？　東横さんなら家の用事で帰ったぞ？」

帰る前に一言言ってたが

……まさか気付かなかったのか？」

「ま、マジ？　スゲエな東横さん。ジョジョ以外の皆に気付かれずに帰るなん

て……」

まっ？　その当の本人は目の前で今の状況を面白がって笑ってるが？

それで俺もつられて笑うわけよ。

そんなこんなで時間も過ぎて、今は昼の12時丁度。教室も俺と東横の2人きりで、他の奴らはもう帰ってる頃だろう。それで俺はというと……

「さあ〜とと……家帰っても暇だし、時間もいい頃合いだし、ここで弁当でも食べて帰るとしますかねえつと」

「えっ!!? 今日って購買開いてたつすか!!?」

「いんや? 今日が開いてねえよ? まあ明日から授業だから、明日から

なら開いてんだろうな」

「じゃあお弁当つて……」

「ああ、それはこれの事よお。いつもの日課でつい今日も作っちゃまった手作りだぜ!!?」
「ほ、星条くんの手作り弁当つすか!!?」

なんか驚いてるような顔でこつちを見てきた。あり〜? まさか俺つて家

事ができないって思われてたか? まあなんだ……俺のなりがこんななら

そう思つちまつても当然か?

ああ因みにだが、俺の容姿と声はジョジョに出てくるジョセフそのまんまだぜ?

ただ中身が違うつてだけで、話し方は真面目な時以外はこんなだったな。

「Exactry!!? This lunch box is

my hand made.

「な、何で英語つすか？」

「まあともかくとして頂きまあす！」

「あれ？ 一つの間にか質問が流されたつす……」

そんな発言が聞こえた訳だが、俺は気にせず食べていた。いんやあ……やつぱ今日も美味いな！
流石俺だぜ!!？

「……」ジーツ

とまあそんな風に食べてたら、隣から視線を感じたら。横を向いたら、案の定東横で……俺の弁当をジツと見てたんだ。まあなんだかんだ言つて昼だしな。東横もお腹空いてんだろう。てな訳で……

「何なら少し食べるか？」

「えっ？ 良いんすか!!？」

「ああ、一人で食べるのつて、なんか寂しいじゃん？」

作ってきた方だからよ。だから一緒に食べようぜ？」

「っ!!？」 ありがとうっす!!？ なら……」

そう言つて東横は俺の方に目を瞑りながら口を開いて……

「あ、あくん……」

（ああ……俺しか箸持つてねえから食べさせてつて事ね？）

「東横、あーんするのは良いが、まず何が良いか決めてからな？」

「星条くんが食べさせてくれるなら何でも良いっす」

（こ、こいつ……何つて事をサラリと言いやがるんだ？）

これ本当にコミニ

ケーションゼロが取る行動か？！

っというかドキツとした……）

まあともかくとして、弁当の中では定番の卵焼きを1つとつて東横の口の中へ……

「はいあーん」

「あーん……」パクッ

おつ、すんげえ美味しそうに食べてらあ。これは多めに作つてきて良かったぜ！！？

（ああ……この卵焼きとても美味しいっすけど……星条くんとの間接キス／＼）

ジョジョは、まさか自分の前で彼女がそんな甘い思いをしている事を全く知る由も無

い。そしてそんな楽しい時間はあっという間に過ぎていったのだ。次回に続く！！？

t o

b e

c o n t i n u e

↓

3話

オンラインで対局！

よお皆！

ジョジョこと星条承悟だぜ!!?

今は昼の1時くらい

で、弁当も食べ終わったところだぜ!!?

えっ？

弁当食べるの遅くねえ

かって!!?

おいおい、お前から前回の話ちゃんとして見てたかあ？

確か

に俺1人だったらあれぐらいの量は15〜20分ぐらいで食べれるぜ？

で

も今回は2人で食べたからな！

それも相手は女の子……相手のペースに合わ

せたり、途中で談笑も入ったに決まってるだろう!

それによ……箸1つしかないんだぜ?

だったら時間かかるに決まってるかあ

! それともあれかあ?

箸を東横に渡して俺は素手で食べるってかあ

? 確かにオニギリなら素手で食べたって良いけどよお……他のを素手で食べる

るとかないだろ? それに女の子の前でだぜ?

できるわけねえじゃ

ねえかよそんな事よお!

まっ?

相手からの評判が落ちてても良

いつてんなら構わねえぜ?

俺はやらねえからな!

「ところで星条くん、気になってたんすけど……今日は入学式だけで何もなかったつすよね?」
何でこんな時間まで残ってたつすか?」

「何でつて……それ言うなら東横こそ、何でこんな時間までここにいるんだ?」

「えっ!!?」

こそ、それは……//

星条くと話したかったか

らつす//

(oh……なんか不意にドキツとしたぜ……)

「そ、それで……私は答えたつす。こ、今度は星条くんの番つすよ!」

なんか東横が顔を赤くしながら言ってくるんだが……すげえ可愛い。それになんか震えてるように見えるし、もうお持ち帰りとかすげえしたい!!?

(つと……いかにいかに。落ち着けえ……c o o ーになるんだ俺)

「こ、こほん……ああ、俺がここまで残つてた理由な……まあ外見れば分かるぜ。ていうか、今までここで話したり弁当食べたりしてる時にも聞こえてただろ？」

「そ、外つすか？　それに聞こえたつて……」

俺は窓の外を指差して、東横もそれにつられて窓から見える外の景色を見た。すると本人も納得したような表情をしていた。

そう、俺がここにこの時間まで残つていたのは、この学校の部活がどんなのがあるか
なつて事だ。外を見れば女子だけの部活や男子に人気の部活の練習が行われていた。

「へえ……こんな時にも部活の練習してるんつすねえ〜」

「ほんとな。大体入学式の日とか、部活の練習するつてのはあんまし聞いた事ねえけどよ……こここの学校は文武両道をモットーにしてて、学力も部活の成績も高いんだつてよ。そんなでもつて、この高校から卒業した先輩方では、普通に有名になつて活躍してる人達多いんだと」

「そ、そんなんすか？　それは初耳つす。それでその……星条くんはやつぱり、体育会系の部活に入るつすか？」

そう言つた東横の顔を見たんだが……どこかしら悲しそうな顔で俺の事を見ている。
（ええつとおく……この状況一体何？　俺なんかまた悪い事した？　わ、

分からん……俺は一体何しちまつたんだ!!?)

とそこまで考えて、さっき言われた発言でなんか引つかかったわけよお。確か……『体育会系の部活』って言ってたなあ。はあはあなるほど……そゆことね。つまり東横は、俺がこんなガツチリしたような身体だからどっかの運動部に入るんじゃないかって考えてるわけだなあ？

(ははあく〜ん……そうと分かれれば少しからかってやるか)

「そうだなあく〜……確かにどこの『運動部』系の部活も魅力ありそうだし、普通に楽しそうだからなあ。それに比べて文化系はパツとしねえしい〜……俺『運動部系』の部活に入ろっかなあく〜！」

とまあある部分を強調して言ってみたわけよ！

そしたら東横の奴、「そ、そ

うっすか……確かに星条くんなどの運動系の部活でも活躍できそうっすよね……。」と意気消沈しながら言ってきた。それも暗い顔しながらな……。

(……これはやり過ぎだな……なんか目もハイライト無くなってるような……)

まあこれはあくまでもお巫山戯に過ぎない。確かにどの運動系に行ったところで、この身体つきとあの能力だ。中学の頃試して見たが、あの呼吸法で100km走って見たら、もう息切れとかそんなのしないレベルまで能力が昇華してたわけよお!!?

ってなわけだ！

俺はどの運動系の部活に入っても、即戦力として活躍する

自信がある!!?

特に陸上とかな！

だがな……

（男子だけの男臭い部活なんて誰が好き好んで入るかよ!!?）　できうる事なら

そんな所より、人数少なくとも女子と話せる部の方が断然マシだな!!?）

この男……理由が極端過ぎるのである!

何かで活躍して人気になるのではな

く、ただ異性と会話とか活動する方が自分にとつて価値があるものだと思っっているのだ!!?

そんなしょうもない考えを普段から持っているのだ!!?

（つて、今誰かに蔑まれたようなニュアンスで言われた気がする……なあんか腹立つてきたから、直感で見つけ次第ぶつ飛ばすか……。ああ、それも男の場合ね?

まあそれより先に……)

俺は椅子から立つて東横に近づく。本人は自分の中で何か考えているのか、近づく俺に気付いていない。

そんな本人の頭に俺は、優しく自分の手をポンと置いて優しく撫でてやった。するとやっと俺と今の状況に気付いたのか、顔を赤くして慌ててた。

「な、なあつ!??」　星条くん何してるつすか!??」

「ん?」　いやな……さっきのあれ……嘘なんだわ」

「えつ……嘘つすか?」

「ああ……確かに俺は運動とか体を動かすのは好きな方だし、今から入ったて即戦力になる自信はある。だけどよ……俺男ばつかの部活とか嫌なのよねえ……男むさいし」

「そ、それを星条くんが言うっすか!!?」

「はっはっはっ! 確かにその通りよなあ!

まあともかくとして、俺は

運動部系の部活に入る気はねえぜ?」

「えっ? でも、部活の中には男女混合のものもあるっすよね?」

「まあなあ? でもよ、今の俺は運動部とかよりもある文化系の部活に魅力を感じ

てるのよねえ」

「えっ? それって何っすか?」

「ああ、入学式終わって教室行く前に、偶々部活動の勧誘が集まってる掲示板見たんだよなあ。んで、そこである所に目が止まったわけよ!!?」

「そ、それって……どこの部っすか?」

「それはな……ジャジャーン!!? 麻雀部だぜ!!?」

「ま、麻雀部っすか!!? って、星条くん麻雀できるんすか!!?」

「E x a c t r y !!? I c a n p l a y M a

h j o n g !!?」

「ま、また英語っすか……」

「ってなわけでき、俺麻雀部に入ろうと思うわけよ。まあその前に、そこにいる人達がどれほどのもんかってのを確かめてみてえからさ、実際に今日の活動時間にその人達と

やってみようかなって思ってたわけよ!!?」

「そ、そうだったんすか?　　で、でもそれだと、もうその麻雀部も活動時間に入って

るつすよね?

部室の方に行かなくて大丈夫なんすか?」

「チツチツチ、それだとなあ〜んか面白みが無くなえか?」

「えっ?　　そこは面白さとか追求する所なんすか?」

「まあ俺にとつちやあなあ〜。そんでここ注目な!!?」

「……学内のオンラインで麻雀打てる人募集中すか?」

「そうそう、これなら匿名や偽名で麻雀打つ事が出来るからな!　　それに俺も

どちらかと言えば、人と打つよりもオンライン上で打つ回数の方が多いしな。だからま

ずはこれで対局してみんのよ!　　丁度ノートパソコンもここにあるし!!?」

それで俺はノートパソコンを立ち上げてすぐ様学内のオンラインに入り、麻雀部の所をクリックした。まあユーザーアカウントとか、そこんところは既に自分仕様にカスタマイズしたし、ハンドルネームもいつものオンラインで登録した。そしてある機能も付けてるから、普通に打つよりも奴さんは驚いてくれるかなと期待もしている。まあ遊び心ってやつさ。

「さて……んじやまあ対局してみつかない?」

俺は麻雀部のオンライン対局室に入った。

s
i
d
e

???

「さて、今日も一応活動の日にしたが……やはりほとんどの1年は帰るか」
「そうですね。やっぱりまだ部活とか決めてないのでは？」
「ワハハ、それかももう入る部活を決めてるかだ」

「だが、だからと言ってこのまま解散というのも勿体無いな。取り敢えずは学内のオンラインでいつも通りに麻雀をしよう。例えば数が集まらなくても、足りない数はCPUにして貰えば良い」

私達、鶴賀の麻雀部は実質3人しか部員がいない。蒲原がこの前幼馴染を強制的に入部させるとか言ってはいたが、それでも4人だ。県大会の団体戦には出れない。

確か3年ほど前から男女混合の部もできたから、男子が入っても団体戦には出れる。だが、私たちの部は男子部員はいない。世界人口のうち、麻雀人口は1億人だから競技としては主要に入るだろう。

だがうちの学校では何故か入りたがる人はいないし……そもそも設立したのが最近になるから知名度が低いというのもあるが……

(だがどちらにせよこのままでは団体戦には出れない……何か良い策は無いものか……)

そう考えながら学内オンラインで麻雀部屋に入る。私が入った時には、私のハンドルネームである【かじゅ】、部長で私と親友である蒲原の【カマボコ】、そして2年で今の所唯一の後輩である津山の【むつきー】がそのオンライン麻雀部屋に入札していた。

「さて……望み薄だが、少しの間待ってみるか……」

そう呟いて数十秒後の事だった。パソコンからピコンツと音が鳴る。それと同時に、

見慣れぬハンドルネームが私達が入っている麻雀部屋に入ってきた。

「部長!!?」 これって……」

「ワハハ、どうやらこの学校にもうちの部に興味がある物好きがいたものだねえ」

「それはともかくとして、このプレイヤーに挨拶しよう」

相手のハンドルネームを見て見ると、「j o e s t a r」とネームが付けられてあった。既に名前が付いていることから2年生かと思った。それはさておきとしても、私は素早くタイプピングして相手にメッセージを書いた。

「かじゅ」 こんにちは！ 君は麻雀に興味があるのかい？

最初はこんな感じで様子を見る。そしたら相手の方からも返事が返ってくる。

「j o e s t a r」 どうも初めまして!!? 私はj o e s t a rと申します。よろ

しくお願いします!!? そうですね、麻雀は好きでネットの方でもやっています

!!?」

これは予想外の返事だった。まさか麻雀に興味がある以前に、ネットでもやってる人

とは……

「こ、これって！ この人ならうちの部に入ってくれるんじゃないですか!!?」

津山が少し興奮気味に言う。確かにその気持ちは分からないでもない。もしこの子が入ってきてくれたなら、蒲原の幼馴染も入って団体戦の人数も合う！ 少なくとも

も男女混合に出れるぞ!!?

「ワハハ、これは期待の新人の予感だね!

まあ数もあつたようだし、さつそく麻雀

するか誘つてみるか」

【カマボコ】やあやあ、来てくれてありがとう!

さつそくなんだけど、私達と何局

か打つてくれないかな?

ああ、勿論時間があればで構わないよ?

【j o e s t a r】えっ!!?

良いんですか!!?

勿論対局して欲しいで

す! あつ……勿論そちらがよろしければですが……

【かじゆ】ああ!

勿論良いぞ!!?

それじゃ早速やつてみようか!!?

【j o e s t a r】はい!

お願いします!!?

そして私と蒲原と津山の3人、そして【j o e s t a r】を含めた4人でオンライン麻雀を始めた。

東 1局目

7巡目 蒲原

(ワハハ、これでリーチだ)

私はいらない牌を捨ててリーチ棒を場に出す。

13巡目

津山

(役は小さいけど、これでリーチとドラが当たれば!)

津山もリーチ棒を場に出していかない牌をきる。

15巡目

加治木

ここまで来て2人リーチ……そして私の方も役ができた。今リーチをしてるのは蒲原と津山、そして私だ。j o e s t a rには悪いが、ここは私もリーチをかけさせてもらう!!?

私もリーチ棒を出していかない牌をきる。

そして私達3人は自分達の欲しい牌が来るまでツモ切り。当たった時は仕方が無い

が、それとは別に……

(この状況……joe starにとっては辛いな)

そう思いながら自分の欲しい稗以外はきつていった。

だがそう思ったのもその時までだった。

「あっ、これは……」

最後がjoe starだったから、joe starでこの1局目は終了だ。正直私を含めリーチしてた皆は、joe starがきる稗で上がれると思っていた。

だが、joe starがきつた稗は誰の有功稗でもなかった。

リーチをしている私達は普通に聴牌だ。そしてjoe starは……

【joe star】私も聴牌です!

そしてjoe starも聴牌で見せてきた。

「ワハハ、私の欲しかった牌をjoe starが持ってたなあ」

「あつ! 私の欲しい牌も!!?」

「私の牌もだな……運がいい奴だ」

そして全員が聴牌だったから、親の蒲原の1巡だな。

そして東場の1巡目が始まった。だが、この時誰も予想していなかったんだ。まさか

……

今私達が相手をしているユーザーが、私の想像を遥かに超える打ち手だったとは……

それに気づいたのは、蒲原が親の「東場3巡目」のが終わった時だった。

「せ、先輩……幾ら何でもこれは……」

「ああ、私もそろそろ異常だと思いはじめていた頃だ」

「ワハハ、これは偶然には見えないなあ」

そう、あれから蒲原の親は動いていない。そして私達の点数も変わっていないときた。2巡目からも、役は普通にできていた。まあリーチをかける時もある、そのまま黙聴の時もある。だがそれでも和了る事もなかった。津山も蒲原も、それにjoe star 同じなんだが、私達の和了牌を持っている状況だった。

(まさかこの子は、私達が何が欲しいのか分かるのか?)

私がそう言い始めた時だ。

【joe star】さてさて、一応ここでウォーミングアップは済みましたんで、ここからは本気でいきますよ!!?

「……これまでは本調子ではなかったのか……」

そして、蒲原の親で4巡目が始まった。だがそれでも……

「り、リーチ！」

津山が千点棒を場に出してリーチ宣言を出した。だがこのままではさつきと同じだ。joestarが言った事はハツタリなのか？

【joestar】今かじゅさん、私がさつき言った事ハツタリだと疑ってるでしょ？
(なっ!!?)

その時、背筋が張り詰める感覚に襲われた。何故実際に私の顔も見えてないのにそんな事が言えるのか……そもそもこれはオンラインだ。そんな事を考えているかどうかさえも分かるわけがない……

(だが……相手がもし規格外の相手なら……)

私がそう思っていた時、joestarが牌をきる。そして、蒲原もjoestarが言った発言に不信感を持ちながら牌をきったとき、またjoestarから……

【joestar】そしてむつきーさん、次にあなたがきってしまう牌は索子の2です。
「えっ!!？」

津山は既にリーチをしているから、相手が欲しいと思っっている牌であつてもきらなければならない。そして津山が自動的に牌をきったときそれは起こった。

『俺の出番だぜ!!??』

いきなりパソコンの画面に現れたのは、白人系でガタイが良く、全体の筋肉が盛り上

がっている男の画像だった。って……

(こんなシステム内のオンラインにあつたか!?)

『今回俺が見せる技はこれだ!!?』

私が……いや私達がそう思っている間でも、パソコンの中に映し出される人物の動きは止まらない。

『そう! 俺の代名詞の1つでもあるクラツカーヴオレイだぜ! まずはこの

つに波紋を練り込んで……』

すると紐の両端に付いた鉄球が光を浴び始める。

『よおっし! これで準備かんりよ』

ここから何が起こるかと思つたら、男が振り回していたクラツカーヴオレイが手から離れ、津山が捨てたたである牌を通り越して奥へと行つてしまった。

『……手遊びが過ぎたか……チックシヨ……もつと練習するんだつたぜ』

男が顔を手で覆いながらそう呟いていた。やはりさっきの予言じみた事はハツタリか……

(だが、こうしたパソコン上でこんな演出はなかなか無い。誰がしてくれたかは分からないが、これはこれで面白みが『なあーんてな!』なんだ!?)

悲嘆に暮れていたと思つていた男が突然口の両端を吊り上げてニイツと笑っていた

んだ。

『ここからが本番だぜ!!?』

すると、男がもう片方で持っていたクラツカーヴオレイを投げた。それはまたもや牌を通り越した。また失敗したかと思つたら、今度は柱にめり込んでゐるクラツカーヴオレイの画面に切り替わり、そこに先程投げられたクラツカーヴオレイの紐部分が当たる。

そして、壁にめり込んだクラツカーヴオレイは、先程投げられたクラツカーヴオレイの紐と連結して、あろうことか最初に捨てられた牌に当たり男の手元に戻ってきた。

『これぞ名付けてクラツカーブーメラン! 成功だぜ!!?』

男は活き活きとした表情でそう言う。そしてそれに当たった最初の牌に巻き込まれたかのように、場に捨てられた牌がその男の元へと向かつて行つた。

『たかだか玉つころゝ一つで俺に勝てるわけねえだろ!』

筒子の1が男によつて碎かれる。それから萬子、索子と小さい値の物は簡単に碎け散つて行つた。だが大きい値の物は、自らの意思を持っているのか、牌の中から飛び出して男に襲いかかる。

『おおこわ! これはいくら俺でも絶体絶命かあ!!?』

まあこんな時は……

おーい! シュトロハイム!!?』

『ん!!?』 どうしたジヨジヨ!!?』

そこに新たな人物が現れた。ガタイはジヨジヨと呼ばれた人と同じみたく、肌も白く髪の色は金髪だった。ただ……髪型はおかしいと思う。

『今絶体絶命中』

『なに!!?』 なら俺が力を貸してやるぞ!!?』 我がドイツのかが『と言うこ

とで髪貰うぜ!』ギャアーツ!!?』

シユトロハイムの髪の毛が幾らかジヨジヨにむしり取られる。

『よおーし、これに波紋を流し込んでつとお!!?』

するとジヨジヨは髪を辺りにばら撒いた。次の瞬間……

バチバチバチバチ!!?』

ジヨジヨに襲いかかってきた牌はそれに弾かれた……つて。

(あんな髪の毛存在するわけないだろ!!?)

『名付けて波紋ヘアアタック!!?』 そんじゃこつから仕上げだぜ!!?』

私が突っ込んでることなんか御構い無しにジヨジヨはまた懐からクラツカーヴオレイを取り出して、自ら捨てられている牌の元に向かう。その牌は、先程津山がリーチの

時に捨てた索子の5だった。

『うおおおつ!!?』

ジョジョは索子の5下部分の竹を削り取った。そして上部分の竹が下に落ちる。

『感じるぜ!』

竹から伝わる生命エネルギー……小さいながらも美しい容姿を持

つ姫さんよお!!?』

そしてジョジョは、赤い竹をクラツカーヴオレイで削り始めた。

『震えるぜハート!!?』

刻みつけるほどにビートオ!!?』

竹と月と竹月

の姫が織りなすharmony!!?』

『波紋Moon』

Flash

Bamboo

Princess疾走!!?』

(月光に照らされる竹月姫オーバードライブ!!?!)』

ジョジョのクラツカーヴオレイが緑に輝き、竹の中央部分を割った。そして割られた

竹の中からは、美しい着物を着た小さなお姫様が現れた。

『お見事にございます』

『これで俺の勝ちだぜ!!?』

そして津山が自動的に捨てられた牌が明らかになる。それは……

索子の2だった。

【j o e s t a r】緑一色(りゅーいーそう) 役満で私の勝ちです!!?

この時初めて、対局した相手がとんでもない奴だと知ったんだ。

s
i
d
e

c
o
n
t
i
n
u
e

o
u
t

&

t
o

b
e

4話

その気持ちは痛いほど分かる

s
i
d
e

東横

私は星条くんが学校のオンラインで麻雀をしているのを見ていた。相手はこの高校に所属している麻雀部の人達で、会ったことが無いから強いのかどうか分からない。

私も偶にオンラインで麻雀はする。まあ自分の実力がどうかと問われればちとぼちと答えるっすけど。

そして隣の星条くんの実力はというと……

(最初は当然少しバラツキがあったっすけど、6巡目辺りでもう聴牌……)

毎回星条くんの所に来るのが、持つてる牌の隣か同じ牌だった。

(しかも一盃口と北の自風牌で最低でも二翻ある。まずまずの滑り出しっすね。後はドラがのるかどうか……)

そんな中で対局する相手の1人がリーチした。相手も中々早く役ができたようっす。そして後の2人もリーチをかけた。

「このままじゃ誰かに和了られるかもしれないっすけど、星条くんはどうするっすか?」「ん?」
「そうだな、俺はリーチせずにごのまま行っくぜ。それに今きた牌……これは

カマボコって人の待牌っぽいな」

そうして星条くんは自分の手牌の中から北を1つ捨てた。これで自風牌は無くなった。それから星条くんは、来た牌を自分の手牌に加え、最初の方で揃えていた牌を捨てた。

そして星条くんが捨てた牌で1局目は流局した。リーチしていた3人は当然ながらも、星条くんも聴牌していた。役は無かったけど、それでも聴牌で自分でツモれば和了ってたつす。

全員の聴牌を見たつすが、全員が欲しい牌を星条くんが握っていたつす。

元の手牌をきって違うのに作り変えるのは決断力が伴うものだ。でも星条くんはそれを躊躇わずに行い、結果的に誰にも振り込まずに自分も聴牌した。

運が良いということもそうだと思う。でも星条くんは……見た感じどこかそれだけじゃ無いような気がするつす。

そして私の勘は当たった。何故なら、その後の東場1巡目から3巡目にも、彼は誰も振り込まず全員が聴牌したという状況だったから。

(星条くんは……多分誰がどの牌を欲しいかの確に分かっているつす)

そして迎えた4巡目には……

「よお〜っし！」

肩慣らしもこれぐらいにして、少し本気出すとしますかねえ〜」

星条くんの顔がニタアつとした笑みを浮かべていた。それも何かを考えて、それを今から実行するかのように……

そして、結果を言えば星条くんの1人勝ちだったつす。

(それよりもあの演出は何か意味があつたんすかね?)

それだけが後に気になって、中々頭から離れなかつた。

s i d e

o u t

「さてと、一応勝ってそれなりに楽しめたし、時間もちょうど良い頃合いだから、そろそろ帰るかなって」

俺はオンラインの麻雀で勝った後、麻雀部の人達に時間になったから帰るといふ旨の連絡を送って麻雀部屋から退出した。

（大体この部に入っている人達の実力は分かったし……後は俺がどうやって部に入るかだな）

あ？

普通に入部すればいいじゃないかだってえ？

何言ってるんだお

前！

そんなのなんも楽しくねえじゃねえかよ!!?

はあ？

い

つも楽しさを追求する所が違うってえ？

ほっとけ!!?

こちとらいつ

もこんな感じなんだ!!?

見目麗しい女性から言われたんだったら10秒ぐら

い考えては見るが、それ以外は黙ってろお!!?!

てな訳でこの話題終了な！

「星条くんって、麻雀強いっすね」

「ん？ それほどでもねえよ。俺だって負ける事ぐらいいある。全部が全部あんな感

じじゃねえしな」

「それでもあの打ち方は中々できるものじゃないです。それも綺麗に揃っていたものを

……」

「確かに大体のやつは手を変えたがらねえ。なにせ次来る牌が何なのかわかるはずもねえからな」

「それだと、星条くんは分かるって言い方すすよ?」

「ん? そうか?」

俺は普通のことだと思つて言つたんだが……まあそこ

はいいじゃないよ!

さて、結構時間も潰せたことだし、俺はそろそろ帰るが

……東横は帰らないのか?」

「私?」

そうすすねえ……確かにこのまま学校残つてもやる事ないから帰ろうか

な」

「おう。なら鍵閉めるからよ。東横は先出てくれ」

「う、うん」

そして俺は教室の施錠をして学校を出た。その時に東横と出たな。

「そーいやあ、東横の家つてどこなんだ?」

「私?」

私の家はこの道をまっすぐ行つた突き当たりを左に曲がつたところにあ

るすすよ。星条くんはどこすすか?」

「俺の家はその突き当たりを右に行つたらあるぜ」

「そーなんすか?!」

なら以外と近いすすね!」

「と言つてもまあ、もう少し遠いところだがな」

そう、俺の家はここから少し遠い。小中学生の時も、家から遠かった。高校もそうだが、今までで一番近いところかな。

「そうっす！　　星条くん、もう良かったらで良いっすけど……明日私と学校に行きませんか？」

「ん？　　ああ、東横が構わないなら良いぜ？」

「っ！！？」　　ありがとう！　　なら約束っす！！？」

……
右手の小指の方を俺の方に突き出してくる。確か、テレビのドラマでやってたような

（そんで俺も小さい頃にやってたような……なんだっけ？）

「ど、どうしたっすか？　　ま、まさか……私と一緒にいきたいは……」

「えっ？　　い、いや！　　そうじゃないんだ。ただ……その小指を突き出す

その……行為が何なのか分からねえんだ」

「そ、そうだったんすか？」

「小さい時に……母親とやった記憶はある。ドラマでも見た事はある。だが……それが何なのか分からない。そのドラマも小さい時にそれっきりだし……」

「なら、まずは小指を出すっす。私と同じように」

「……、（？）うか？」

「そうっす。それで……」

俺の小指と、東横の小指が絡まる。そう、小さい時とドラマで見た時と同じように……

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ますっす。指きつた!」

そんな言葉と同時に俺の小指と東横の小指が離れた。

(ん?) ちよつと待てよ……さつきなんか途中で不穏な単語が聞こえたような……
て)

「針千本だと!!?」 そんな事したら死んじゃうだろ!?!」

「ふふ、本当に間に受けてるっすか?」 可愛いところあるんすね星条くんは」

「か、かわ!!?」 ンな訳あるか!」

「ふふふ、あたふたしてるっすね。まさか不意打ちとか苦手なタイプだったなんて……これは良い情報を知ったっす」

「おい!」 そんな情報知っても何にも何ねえだろうが!?!」

「それとツツコミ役つと……」

「メモしてんじゃねえ!!?」

「あははは!」 星条くんって面白いっすね!

「私、帰り道にこうやって誰かと楽しく帰るの憧れてたんすよね」

「……そうか」

「はい。できれば行く時も、1人じゃなくて……こうやって楽しく行きたいなあって」

東横は、儂げな笑顔を浮かべながらもそう言った。これまで東横は、自分の体質で友達ができなかった。それで今まで人とコミュニケーションを取ることを捨ててきた。

だが、俺という彼女を見れる奴が現れた今……彼女は明るく振舞っている。まるで、もう1人は嫌だというふう……

そう見えてしまうのは俺だけかもしれない。でもその気持ちはよく分かる。なんつ たって……

(俺も……1人だったからな……)

「ご、ごめん……少し舞い上がりすぎたっすかね……」

「いや良いんだ。俺も……東横の気持ちは分かるからな」

「えっ?」

「それで? 明日俺と学校に行きたいんだったか?」

「っ! 約束っすよ!!?」

それで俺たちはその道で別れて家に帰った。そこで俺の家も見えてきた。東横の方は、既に家に帰ってるだろう。

家の玄関まで後5歩……鍵を取り出す。

玄関まで後2歩……鍵穴に鍵を差し込……

「みいーの前にまずはポストの中を確認な」

ポストの中身を覗く。

「あらら、今日はやけに広告多いのなあ」

それを回収してやつと鍵を開けて家の中へ……

「ただいまあー」

シーン……

ああ、分かっているさ。家の中に誰もいないって事ぐらい……

(それでも……家に帰ったらこれだけは忘れねえ………なんたって、この家だけは俺を置いて行かなかったからな)

変な事だつて事ぐらい分かっている。ああ、十分分かっているんだ。俺以外の家族が目の前からいなくなっても……この家だけはずっとここにあった。家だから人のように自由に動くんなんて事はねえ。当然の事だよな？

それでも……俺がここまで育ったのはこの家があつたからだ。確かにここから出て行った家族からの振り込みもあつたからこそ、今まで飢えることは無かつた。でも、中学のある日からは、それは使つてない。別にアルバイトをしたから不要になつた訳でもねえ。

だから、俺が今まで生きてこれた大半はこの家のおかげだ。

(まっ、家族が俺のために残したのかどうかは知らねえが……結果的には家族のおかげって事かもな……)

なら、何で俺一人にしたんだ……

(いや……考えなくても分かりきってることか……)

まあ暗い雰囲気なのはここまでな？

それにしても本当に今日は広告が多いなあ。アルバイトの求人……これは家電製品の宣伝か……後は……

広告の中からヒラツと床に落ちた。それはある一通の手紙だ。それも海外版からの

……

(ああ……今年もこの日が近づいてきたんだな)

俺はそう思いながらもその手紙を拾った。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e

↓

5話

だぜ!! ?

入部するのはこの条件をクリアしたら

入学式翌日……今日から授業が開催される。まあそれでも最初はデモンストレーションのみたく、教師の自己紹介から入るんだろうが……

それで俺が今何してるかっていうと……

「えへへ、こうやって誰かと一緒に学校に行けるなんて……まるで夢っすね！」

そう、今は学校に登校している最中だ。俺の隣には東横がいて、とても嬉しそうにしながら歩いてる。それを見てると、なんだか微笑ましく思えてくる。

普通なら、誰かと一緒に登下校するぐらいで夢のようだとは思わない。それこそ、有名人と一緒に歩くとか、同じ時間を過ごすとかだつたらそりゃ納得だが……

（でも、これは東横にとつては非日常だつたんだ。そう思つてはしゃぐ気持ちは……俺にも普通に分かるぜ）

ああ、なんでこんなに可愛くていい子なのに、誰にも認識されなかつたんだろう……物静かではあるが、ちゃんと人とは会話ができる。こんなにも人前で明るく振る舞える。

なのに……たかだかの体質のせいで今まで認識されにくい、はたまた認識されないなんてよ……

（ずつと一人みたいなものじゃねえか……悲しすぎるにも程がある）

「星条くん、そんな難しい顔してどうしたつすか？ やっぱりと一緒に楽しく

ない？」

「ん？ いやいや、んな訳ねえよ！」

ああ！

神に誓つたつて良いぜ

!!?」

「いかんいかん、つい難しく考えちゃったぜ。逆に不安がらせてどうすんだ……」

「そう……すか?」

それなら良いんだけど」

「ああ! 実際に俺も、こうして東横と一緒に登校できて楽しいぜ。それによ……」

「それに……?」

って、ふあふいふるつふはあ!!?」

(何するっすかあ!!?)(」

「東横はそんな暗い顔よりも、笑っている方がすんごく可愛く見えるんだぜ? 自分で気付いていたか?」

俺は笑みを浮かべながら東横の両頬をつまんで少し引つ張る。本人は突然の事で驚いていたが……」

(てかつなにこの感触!!?)」

すんげえもつちりしてんだだけど!!?)」

最初は少しの間するつもりだったんだが……なんだかこうしているとハマっちゃったぜ。なんなんだこの頬は? なにでできてんの? えっ? 東横成分

? そんなん初めて聞いたわ!!?)」

ていうか東横の頬なんだからそれででき

てて当然だろ!!?)」

でも東横成分ってなんぞ?

「いふまふえやつふえるつふか!!?(いつまでやってるっすか!!?)」

「ん? おお、すまねえ。つい夢中になっちゃまって……」

「むう……ほっぺが赤くなっただけだ。だから星条くんもこうっす!」

「なにっ!!?」 　　つて、いふあいいいふあいいい　　おふえほほまふえいふあくひ

ふえねえよ!!?」　　(痛い痛い!)　　俺そこまで痛くしてねえよ!!?」(「

「あははは、やられたら倍返しっす!」　　これは常識っす!!?」

そんな常識あつてたまるかー!!?」　　つて心の中では叫んでみるけどよ……

(ああ、別にこれで東横が笑ってくれるって言うんだったら、俺は鎌わねえよ)

そんなこんなしているうちに、学校に着いた。まあ待ち合わせって言っても時間とか指定してなかったしい?　　でも女の子を待たせるわけにやいかねえだろ?

だから早めに準備して待ち合わせ場所待ってはいたんだが……東横も俺が着いてすぐに来たから、そんなに待つことはなかった。

でもその代わりとしては、まだそんなに生徒とかの往来が少ない時間帯に学校に着いたもんだから退屈だ。別に授業の予習は……まだ本格的に授業やってねえからあれだが、やって時間を潰しても問題はねえ。でもそれでもなあくんかなあ……

そんな時に東横がノートパソコンを取り出して俺に向けてくる。

「星条くん、暇なら私と一緒に麻雀してくれないっすか?　　オンラインでなんすけ

ど……」

「おっ!」　　それナイスアイディアだぜ!!?」　　俺も東横が麻雀やるって言っ

てたから、一緒に打つてみたかったところだったのよお!!?」

「っ!?」 嬉しいっすよ! それじゃあ早速やるっすよお!!?」

それで俺達は、HRの予鈴が鳴るまで一緒に麻雀をした。良い時間つぶしにもなったし、それに東横も中々強かったから、俺としては良い時間が過ごせたぜ!

(後は……この麻雀部にどうやって入るかだなあ……)

普通に入部するっていうことに面白みを感じない俺は、東横との麻雀が終わった後頭の片隅ではそう考えていた。

そうこうしているうちに授業も大半が終わって今は昼休憩だ。まあ今日も東横と一緒に弁当を食べているが、今回は東横も弁当を用意して来たようで……

「はい星条くん、あーんするっす」

「お、おう。あ、あーん……」

状況を言ってしまったえばこんな感じだ。ん? 人がいる目の前でよくも堂々とそ

んな事をできるなって? んなわけねえだろ? 俺だつて人がいる前でこ

うするのは流石に恥ずかしい。

だからこそ、あまり人がやって来そうにないところを選んで食べてるんだよ。

「どうっすか? おいしい?」

「ああ! おいしいぜ! これって東横が作ったんだよな?」

「そうっすよ! 手作りとかあまりした事がなかったすけど、なんとか上手くで

きたんすよ!!?」

とまあ、昼休憩はそんな談笑をしながら過ぎていった。時間というのはあつという間
で、楽しい時間ほど早く過ぎちまうもんだよな……

それで昼休憩の後は午後の授業が開始された。まあこれも最初はデモンストレー
ションだから、詳しい内容とかには入らなかつたけどな。

それで放課後……今日から新生は部活に入部できるつて事で、皆躍起になつて回つ
ていた。運動が好きなのは奴らは運動部系……特に男子はその傾向が強い。それでそれ以
外は文化系か無所属かなどちらかだな。まあ俺は既にやりたい事があるから、躍起に
なつて回る必要もないわけで……

「そういえば東横はこの部活に入るんだ?」

「私?　　そうつすねえ……まだ決めてないつすけど……できれば星条くんと一緒
の部活が良いかなあ」ボソツ

「ん?　　なんか後半の方言つたか?」

「えっ!!?　　い、いや、なんでもないつすよ!!?」

「そうか?　　それなら良いんだが……」

(こ、こんな事大きい声で言えるわけないつす……聞こえてたら恥ずかしいつす……)

「まっ、そのうち決まるだろ。俺は俺で、どうやって麻雀部に入るかねえ……普通に入る

の面白くねえしなあ……」

東横がそう思っている横で、この男はそんな事を考えていた！

「そういうえば、今日もオンラインでやってるっすかね？」

「ん？ やってるんじゃないか？」

まあ俺も今日入るつもりだったしな」

そんで俺はパソコンで昨日と同じく学内のオンライン麻雀室に入った。すると東横もノートパソコンを起動して何かをし始めた。まあ気になりはするが……それだとなあんかしつこい男に見えちまうからやめておこう。こっちはこっちで麻雀を楽しむか！

麻雀室に入ると、昨日と同じ3人と……

（ん？ なんだあ〜？）

なんか知らねえユーザーがいるが……）

【かじゆ】また来てくれて感謝するよjoestarくん。今日も麻雀をしに来てくれたのかな？ それと今日初めて入ってくれたもう1人の子も感謝するよ。

【joestar】いえいえ、私も今回も楽しみに来たものですから……

【かじゆ】ははは……君は私達よりも強いというのに、正直楽しんでるのか不安でな……

【joestar】十分楽しんでますとも！

まあそれはそれとして、今日初めて

入っているユーザーの方こんにちは！

joestarです。あなたも麻雀に興

味が？

【guestユーザー】そうですね！

私も麻雀に興味があります!!?

だか

ら昨日あなた方麻雀部の募集の紙を見て、私も入りたいなとは思っています!!?

【かじゆ】そうか！

それはこちらとしても嬉しいな!!?

まあ今はそれより

も麻雀を始めようか！

【カマボコ】やあやあ、なんか盛り上がっているねえ。こちらとしても嬉しい限り。じゃあ今回は私とかじゆ、そしてjoe starとguestを踏まえてやろうか!!?

そしてオンラインで麻雀対決が始まった。さてさて……今回はどんな手で和了ろうかねえくつと……

んなこと考えながらオンライン上で麻雀を打っていた。そんな事もあつて隣でパソコンを開いている東横の方は気にならなかった。

まあそれなりに集中してやつてるつつう証拠だよな！

そんで既に東場の親は

2回流れて3局目……今回は相手もそれなりに戦略を練ってきたようだな！

順

応が早くて恐れ入るぜ!!?

それにしてもお……

(このguestの打ち方……堅実でどこか見覚えがあるようなあ……)

ああでも、こういう打ち方する奴はどこにでもいやがるからなあ……だが、ほんの最近に見た気が……

【guest】joestarさん、その牌ロンです。

げえ!!? 考え事してたらまさかの俺が点数取られちゃうなんて!!?!

【guest】二盃口、ドラ2の5翻30符、満貫8000点貫います!

Oh Noオオオオオツ!!? 8000点だとお!!? クッ

……こいつなかなかやるなあ……

その時隣の東横が笑った気がするんだが……まあ気のせいだろうな。それにしてもこのguest……なかなかやりやがるぜ。俺から点数をとるとあ……

(だが、これでこつちも本気モードだぜ!!?)

そつからは俺の独壇場だ! かじゆから先程guestから取られた8000

点を取り、カマボコからはその倍の16000、そんでguestからは……残念ながら半分の4000点しか取れなかった。

まあでもお? 終わってみりや俺の1人勝ちだったがな!!? そんで2

番目がguestだった。

俺の点数は38000、guestが30000、かじゆが20000、最後にカマボコの12000だった。

【かじゆ】いやあ、今回も負けてしまったな。

【カマボコ】ほんとだよ、わはは……これは手強すぎるぜえ。

【j o e s t a r】いやいや、あなた方も昨日とは違ってどうやら戦略を練って来てたみたいだったんで、こつちとしても楽しめましたし、昨日より手強く思えました。それと g u e s t さんも強いですねぇ！

【g u e s t】いいえ、j o e s t a r さんこそ凄く強いです！ それに皆で麻雀するのとはとても楽しかったです!!?

【かじゆ】そう言ってもらえるとありがたい。それでこんな所で野暮だとは思うのだが……2人とも私達の麻雀部に入ってはくれまいか？

私は3年で今年で引退なんだ。その引退する前に、私はどうしても県予選に出て全国大会に行きたいのだ。私事で申し訳ないが……なんとか入ってもらえないだろうか？

へえ……全国ねぇ……

（向上心があつて良いねぇ！ 気に入つたぜ!!? 是非ともこの方々には全国に

行つて欲しいもんだぜ!!? まあ……それはそれとして入部の件は話が違うからなあ……）

そうジョジョが思っていた時！

ジョジョは唇の端を吊り上げてニヤついていてた！ その顔は、何か良からぬ事を考えている顔だ!!? 一体ジョジョは

何をしようというのか!!?

【j o e s t a r】全国ですか！

それは確かに興味深い!!?

まあ私がどれ

ほど力になれるかは分かりませんが、是非とも麻雀部に入りたい……というのは山々です。が、ただでの入部は残念ながらしません。

【かじゆ】 え……それはどうい……

【j o e s t a r】簡単にいえば、ある条件をこちらが出して、それにクリアすれば入部するという事です。

【かじゆ】条件……か。分かった。その条件、もしよろしければ教えて欲しい。

（よおくし食い付いたぜ！ まあ喉から手が出るほど欲しいって事はこちとら分

かってたからな!!? そんじやまつ、条件書くとするかねえつとお）

【j o e s t a r】私が出す条件……それは、私にあなた方の意地を見せて欲しい。何より見せて欲しいのは……どれだけ自分がハコになったとしても諦めないという信念……それを見せて頂きたい。

【かじゆ】……今まではそこまで本気を出していなかったということか？

【j o e s t a r】e x a c t r y!!? その通りです。なのでこれからは本気

を出して挑みます。調子に乗っていると思われたら……それは申し訳ないんですけど、私を入部させたいというのであれば、どうかそれ程の気概を私に見せて欲しい。

【かじゆ】……分かった！ その挑戦受けてたとう!!? 私達も君を入部させ

るのに本気でかかる気だ!!?

おお!!?

良い返事だこと!

いやあ、これは見所あるぜ!!?

【かじゆ】さて、j o e s t a r についてはこれから対策を練るとして……g u e s t の君はどうだろうか?

かじゆがここでg u e s t に話を振る。はてさて、どんな解答が返ってくるかねえ?
 【g u e s t】私は入部しても良いですよ? ただ……多分あなた方は私を見つ
 けることができない。

【かじゆ】ど、どういう事かな?

【g u e s t】そのままの意味ですよ。ただ入部したいという意思はありますから、私の方からも条件を出させて頂きますね。条件としては……私を見つけることができた
 入部する、という事で……

……ん?

なんだそれ?

私を見つけることができたら……こいつ何

言つてんだあ?

【g u e s t】ああ、後もう1つ条件があります。

(もう1つ? こいつ俺より欲張りじゃね?)

正直そう思つてたんだよなあ。だが、次の文章を見たらそんな余裕がどつかに消し飛んだのよお……

【g u e s t】j o e s t a r さんがあなた方の部に入部する事です。まあ私からは、こ

のどちらかが満たせたら入ります。

「……………は!!?」

こいつ何言つてやがんだ!!?

俺が入部したらはいるだとう!!?

な、な

んでそんな面倒な条件を……

「ふふ、星条くんもこれには驚いてるようっすねえ?」

「なっ!!? ま、まさか guest して……東横か!!?」

「ふっふー……当たり前っすよ。星条くん」

俺が隣を向いた時、東横が自分のパソコンを俺の方に向けながら微笑んでいたんだ。

t o

b e

c o n t i n u e

↓

6話

すのは……

自業自得……後悔……それを癒

s
i
d
e東
横

星条くんが隣でオンライン麻雀室に入っている時、私もguestとしてそこに入っていた。オンラインであれば、相手が誰であろうと私の存在は認識されるし、何より朝星条くんと麻雀を打つのが楽しくて、また一緒に打ちたいと思ったから入った。

麻雀部の方達も私の事を歓迎してくれて、少し嬉しい気持ちになった。まあ星条くんほどではないのは間違いない。そして、いよいよ麻雀部に所属する2人と私、そして星条くんとで対戦した。

そしたら、麻雀部の人達の動きが少し変わっていた。どうやら星条くんに対抗しての事だと思うけど、多分星条くんには勝てないと思う。どうやら星条くんに対抗し

(まあ私は勝ち負け抜きにして星条くんと楽しく打ちたいだけっすけどね?)

星条くんは起動してからパソコンの画面に集中しているから、私が隣で一緒に打つてることには気付いてはいないと思う。私としては、後で驚かせることができると思うとワクワクはするっす!

そして東場の3局目……隣を見ると星条くんは何か考え事をしながら打っていたつす。そして星条くんが突き捨てた牌が、私の欲しかった牌だったのですかさずロンしたつす。

そして隣を見ると、星条くんが頬に両掌を押し込むように当てて驚いていた。それを見たら思わず笑っちゃったつす！

後から気付かれたかなと思っただけ、どうやらまだ気付かれていないようで、こちらとしては安心したつす。

ただ、それとは裏腹に星条くんを本気モードにってしまったのは不味かったつすね。私はどうにかとった半分の4000点しか取られなかったつすけど、後の2人が悲惨だったつす。

かじゆさんが8000点……そしてカマボコさんに至っては16000点も取られてビリになってたつす。カマボコさんに対してはただ一言……ご愁傷様としか言えなかったつす。

それで終わった後、かじゆさんの方から私達を勧誘してきた。星条くんは乗り気みたいすけど、条件クリアで入部って返事を返していた。そして私も思い付いた。私も条件を付けようって……

それは、私を見つけるか……それとも星条くんを入部させることができたなら私も入部するという事つす。こう書いた時、星条くんは何が何やら訳がわからないというような

表情をしていた。

そこで私は星条くんに種明かしをして、guestが私だというように仄めかしたつす。そしたら私の思った通り、星条くんは驚いていた。もうこれは最高に気持ちの良い瞬間だったつす!!?

これまで私を認識させるために、わざと他人の前で踊ったり歌ったりして、結果的に相手を驚かせたようになってしまったつすが、今回は認識できている相手を驚かせる、私にとって初めての経験だったつす!!?。

だから、何故か心の中が満足感で溢れてて……

(星条くんの色んな表情やリアクションをもっと見たい!!?)

なあーんかそんな想いも湧き上がっていたつす。

東横にさつき騙されて、今は家への帰り道を歩いている。勿論俺の隣には東横はいるが……

「さ、さつきは黙っていて悪かったす……だから許して欲しいす……」
さつきからこの調子で俺に謝ってくる。それに対して俺はというと……

「ツーン……」

こんな調子で反応している。いんや、まあさつきの仕返しみたいなものだなあ。これこれ校門から出て5分くらいこうだろうかねえ？

「ほ、星条くん……ほ、本当にごめんなさい……」

まあでもこちらとしてももうそろそろ限界だ……なにせ俺ってそんなキヤラじゃねえしい？ それにさつきから東横の声が震えててなあーんか嫌な予感がするつつうかあ……校門出てから一回も東横の顔見てねえからこちらとしてはすんげえ気になってんのよ。

それでもうそろそろ許すかなって思ってた東横の方に顔かけたらさ……

「……ぐすっ」

(…………なあくにやっつてんだ俺…………)

こんなの…………東横が嫌がる事だつてわかつてたじやあねえか！

なのに俺は

…………またこの子をそんな気持ちにさせちまった…………

本当に情けなく思うぜ。俺としたらさつきのお返しと巫山戯ただけだった。でも彼女はそれを真と捉えちまつてたんだ。全くもつてよ…………なんでそんな事に俺は気付くのがおせえんだよ…………

(それだから…………家族も離れて行っちゃまったんじやねえか…………)

「あんな思いは…………2度とゴメンだ」

俺は東横に聞こえない程度で呟いた。そんなもつて俺の頬を両手で喝を与えるかのようにして叩いた。

「えっ…………な、何やっつてるっすか!?!?」

東横にはどうやら、俺がいきなり自分の頬を叩いてるようにはしか見えなかったようで驚いていた。

そして目の前には昨日の下校時と同じく別れ道が見えた。そこに差し掛かった時、俺は東横の両肩を掴んで俺と対面させる形にした。

「ど……どうしたんすか？」

その声はまだ震えていて、目にも涙が溜まっていた。それを見て俺は、また自分に嫌気がさしながらも東横の顔を直視した。それで東横と目が合った瞬間に、俺は口を開く。

「さっきの態度……悪かったって思ってる。東横をそんな顔にさせちゃまった。ただ巫山戯ただけだったのに……それで東横を傷つけちゃまった。だから……」

「だから俺を、好きなかだけ殴ったって引つ叩いたって構わねえ！　これで東横の

受けた傷を癒せる訳でもない。でも俺は……自分勝手ながらそうされなきゃ気がすまねえんだ！　だから……東横が気がすむまで俺をどうにでもしてくれ!!？」

それで東横の肩から手を退けて、俺は真っ直ぐ立って目を瞑った。それは痛みを堪えるものじゃない。痛みを真摯に感じるがためだ。

「……なら、そのまま目を瞑ってて下さいっすよ？」

返答が聞こえた。俺はそれに従うだけだ。目を開ける気なんてさらさらねえよ。でもそうしてるから色々と考えちまつてる。

許されようなんて思ってたけども、このまま東横が俺の事を嫌いになっちゃったなら

？ 俺の目の前から遠ざかっていて、目を開けた時にそこにいなかったらなら？

そんなの……殴られるよりも辛い。

(でも俺は……東横にそうさせても仕方がない事をした。ハハ……俺の前から誰かがいなくなるのなんて……全部……俺の自業自得じゃねえかよ……)

悲しいと思った。そうなってしまうのが辛いと思った。でも俺は……いつも気付くのが遅れる……。それが偶然なのか……それとも分かかっていて気づきたくないだけか……どっちかわかんねえ。

でも結果的にそうなっちまうのは……全部……

ジョジョの頭の中で……そんなマイナスな考えがループしていた。後悔先に立たず……まさにそれを体現していた。それから生じる悲しみが過去を思い出させ、後悔させ……その延々の繰り返しで、さらには未来にまでその負の連鎖は及ぼうとしていた。だがそれは……突然ある者の行為によって破られたのだ。

「……………っ!?」

目を瞑つてた俺には……正直者何が起こったかの認識が遅れた。でも、顔や体を殴られた訳じゃない。確かに体に衝撃はあった。でもそれは痛みじゃない。逆に温かさを感じる。これは……そう……

(まるで昔……お母さんに抱きしめられてた頃の感覚だ。でも……なんで……)

「星条くん……まだ目を瞑っているっすか？」

「……………ああ」

東横の声が俺の真下から聞こえる。その声は……確かに震えてはいた。でも何でか……さつきとは違う感じがした。

「星条くんは……いつも巫山戯たような態度をとって私を笑わせてくれる。さつきのだって……本当は後から軽い気持ちで巫山戯てたって告白して、それで私を笑わせるつもりだったんすよね？」

俺は……それには返事ができなかった。確かに巫山戯てたのもあった。後から冗談だと言うつもりでもいた。東横の言ったことは……全体的を射ていたんだ。でも……俺には後からそうですつて言う権利なんて無いと……自分の中では思う。最終的に、東横を傷付けたのには変りない。自業自得だつて……

だから答えなかつたし、頷くこともしなかつた。

「……星条くんは真面目つすね。いつもはそう言う風に見えないのに……でも今は、貴方が真面目に私の事を考えているつてことぐらい分かるつもりつすよ？」

何も反応していないのに……東横は俺に言葉を投げかけてくる。その一言一言が……後悔が降り積もる俺の心に入つてくる。それで……何故か心が温かいと感じてくる。

「私の事を……今の星条くんのように考えてくれた人つていないつすよ？」

皆私

を認識してくれていなかったし、親からも認識されにくくなつてしまつたつすから……今まではそれでも仕方ないつて思つてたつす。でも……こうして他の人からこんな風に思われるのが……こんなに嬉しいなんて思つていなかったつす。だから……目を開けて……もう私は許してるから」

俺はその言葉を聞いて……尚更目を開けられなくなつちまつた。なんでかつて？

そんなの……

「どうしたつすか？」

泣いてるつすか？

どこか痛かったところがあつたつ

すか？

辛いことがあつたつすか？」

俺は……こんなにいい子が側にいて良いのかと思えてくる。こんなにも良い子が

……なんで今まで……

（それで俺は……こんなに良い子に悪い事して、勝手に自己嫌悪になつて、謝つて、それで……）

「泣いてる理由は分からない。けれど……私にも、貴方の今を癒せる事は出来ると思つす。だから……」

「私で良ければ、その涙や悲しさが収まるまで側で見守つてあげるつす。それで泣き止んだ後は……私にいつものように巫山戯た口調と態度で笑わせて。そして……いつものように、私に笑顔を見せて」

その言葉で……どうやら俺の涙腺は決壊したようだ。俺……こんなキャラじゃねえのにな……

（でも何故だか……恥ずかしいとか……そんな感覚はねえ）

心が温まるつて……こう言う事を言うのかもしれないねえ。子供の時は小さ過ぎて……よく分からなかつた。でもこれがそれだと言うのなら……俺は弱かつたんだな。

人それぞれによつてその感じ方は違う……だがジョジョは、他から見ればただの仲直

りであるこの瞬間でも、心は強くなっていくのだ。自分の弱さを感じ……他者からの想い……東横の想いから幼かった頃体験できなかった想いを形成させていく。

「ふふっ……星条くんは真面目で、それでいて涙脆い……また新しい星条くんが見れて……私は嬉しいっすよ」

t o

b e

c o n t i n u e

↓

7話

冗談から出た真

あれから何分だった事やら分からねえ……でも、その間もずっと俺の事を見守ってく

れた子がいる。そもそも俺がこうなったのはこの子をからかつちまったのが原因だが……さんでも、この子は俺から離れずに、それで温かく見守ってくれた。

俺も……男がこんな道の往来で泣くなんて事が恥ずかしい事だつて分かっている。でも俺はそんな中で泣いちゃまって。

だけでも……それが恥ずかしいだなんて思つちやあいないぜ。なんでかなんて……そんな理由は俺にも分かりっこねえよ。

けどこれだけは言える……昔と違って、泣いている俺の周りに誰もいないなんて事はねえ。泣いている時に、冷たさなんて事はねえ。なんつたつて……

「星条くん、もう泣き止んだすか？　まだ泣きたいなら、泣いていても大丈夫。私が受け止めてあげるつすから」

今俺の側には……こんなにも良い子がいるのだから。

(ああ……昔からだと考えられねえな)

さて……もう俺も結構泣いただろ？　そろそろよ……お礼とか言わねえとな。

「東横……ありがとう」

まずはその一言を言つて、こつちからも東横を抱きしめる。

「は、はわわわ!?」　ほ、星条くん!?」

俺と東横の身長差は結構ある。なにせ東横の頭が俺の胸あたりに来るくらいだから

な……しかもガタイもどちらかと言えば良い方だし……そんな大男がこんな往来で泣くなんて事は……多分俺が初めてだ。それも女の子の前で……そして女の子に慰められる様な形で……だが恥ずかしくはない。

「俺さ……もし東横が俺から離れちまったらどうしようって、正直考えてたんだ。昔……それも小さい時によ……俺のせいで大切な人達が離れちまったんだ。だから今回も……そんな事になつちまうんじゃないかって……」

「そうだったんすね。それが辛くて泣いてたんすね」

「ああ……でも、側に東横がいてくれたから、ずっと悲しかった訳じゃない。体の内が……心が温まった感じがしたんだ。だから……感謝してるんだ」

「感謝なんていらないうすよ？　でも、もし感謝してるって言うなら……さつき私

が言った様にいつもの調子で巫山戯て私の事を笑わせて下さい。それか……いつもの様な貴方の笑顔を見せて下さい」

「はは……すぐには無理だつて」

「なら、そうしてくれるまで私はこうしてるつすからね？」

「い、いや……それはちよつと……」

「……いや？」

「そ、そんな訳ねえじゃねえか!？」

嫌なもんかよ!

「なら良いっすよね？」

俺はそれ以上は何も言えなかった。まさか俺が泣いた後にこんなに言いくるめられるなんて……思う訳がない。なにせこんなに泣いたのはあの時以来だ。

「よーしよーし……いい子いい子」

それでさつきから東横はこの調子で俺の背中をさすっている。まるでお母さんか……もしくは姉の様な振る舞いといっても過言じゃねえ。

それで俺は未だに東横を笑わす事も笑みを見せれる事も出来ずで……東横に感謝の言葉は述べたものの、抱きしめたまま何も出来てないし……

(つて……今更だがこの状況なんだよ!!?)

ああもう……分かんなくなってきたじやねえかあ!!?

何なんだよ本

当に!!? 誰だよこんな訳わからん状況作り出した奴はあ!!?

はい俺でし

たねえ!

まあともかくとして……頭の中がそんな訳の分からん状況だったから、なんかさつき抱いていた辛い昔とか云々かんぬんがどうでもよくなってきた……

だからこそ……こんな状況も何故か笑えてきた訳よお!

「あつ……やつと笑ってくれた……」

「ああ……なんかよ……頭の中が訳わからなくなっちゃったからか、今のこの状況が

なあくんか面白く見えちまってよ……だから思わずな」

「それでも、さつきより元気にはなってくれたっすか？」

「ああ、おかげさまでな。それで何だが……東横はいつまでこうしてるつもりなんだ？」

「えっ？ 私はいつまでもこうしていい良いとは思っているっすよ？」

……この子コミュニケーション捨ててきたって言ってたけど嘘だろ？ 捨

ててきた人がこんな事を、しかも人の往来でずつとしても良いとかっていうはず
ねえよな？ まあでもお？ 本人がそう言うなら別にこの状況のまま

でもありっちゃありだし？

「そうか……東横が今の状況でも別に構わねえって言うんだったら、俺もそれに甘える
かねえ？」

「えっ？ 私に甘えてくれるっすか？」

「東横が良いって言うんならな。それで？ 東横的には今の状況って、俺のお母さ

んのポジ？ それとも姉？」

「えっ？ そ、それは考えてなかったっすけど……でも強いて言うなら姉ポジ

ションっすかね？ 星条くんと年齢的にも……母親って感じでは無いっす」

「そうか……因みに生まれは何月よ？」

「ええつと……7月26日っすよ」

「へえ、俺の4ヶ月先か！」

なら、普通に俺の姉ポジやってけるな!!？」

「ほ、本気っすか!!？」

「Exac t r y！」

マジだぜ？」

「そ、そそそそんな!!？」

私が星条くんのお姉さんになんて……」

「なれる訳ないって？」

いやいや！

東横にはその素質が十分にあり得るぜ！

なんつたって、今のこの状況がまさにそれだろ？」

だからいけるって!!

？」

「うう……そんなの絶対嘘っす！」

今まで人とのコミュニケーションを諦めて来

た私になれる訳ないっす!!？」

「東横……それは違うぜ？」

「な、何が違うっすか？」

「それは、相手との距離感だ。友達とか親友で一緒にいる時は確かに楽しい。だがな

……それはさつき東横が言った様にコミュニケーションがないと中々難しい。だがな

……姉や母親というのは、別にコミュニケーションが下手でもやっていけると俺は思う

んだ。相手が楽しいと思っていたらそれを分かち合っつて、相手が悲しいとか辛いとかつ

て思ってる時は、相手の側に寄り添う。そこに言葉とかなんていらねえ。ただ相手の事

を思う気持ちがあればそれだけで十分だっつて……俺は思うぜ？」

俺はそう静かに語りかける様に言った。東横は俺の顔を見上げながらそれを聞いてた。まあ半分冗談で、それで半分は本気でこの話をした。冗談のところは勿論、東横の事をからかうつもりで言った。

だがよ……こうも思った。この状況は結構落ち着くつてな。それが東横だからなのかは分からねえが……でも落ち着いた事に変わりは無い。

俺は小1までの記憶が朧げにしか残つてない。特に、抱きしめられたりとかそういうの……あまり覚えてない。

いや、覚えてないよりもあまりされなかつた記憶があるな。なに前世の記憶を引き継いでいるから、それなりの事は自分でやつた記憶もあるし……危ない事もやつては来なかつた。

だから親からは……それなりにしつかり者として見られてた感じはする。それに……俺の方からも抱つことか甘えた記憶は無いかもな。

前世での記憶はあるつてのに……それでも昔抱いてた感情云々は……日が経つていくからから思い出しにくいと思う。母親に甘えた時の感触や匂いも……

それでこつちに転生してからは甘えるなんて事はまず無かつた。だからかな……東横にこんなにされて嬉しいって思つて、まだまだ甘えていたいと思つちまうのはよ……「さてつと……そろそろ時間も時間だしよ。帰るか」

「そ、そうっすね……」

それで俺達は互いに離れた。東横は俺が言ったさっきの言葉に影響されてか少し考え込んだはいたが……まあ明日になれば元どおりだろうよ。それで俺も気分は晴れたし、今日は良い夢見れそうだけぜ！

また明日つつつて俺と東横はそれぞれの帰路へ……

「あつ……今日の夕食と明日の弁当何にすっかな」

俺はそう思いながら帰った。

翌日

いつものように朝早起きして、筋トレとランニングした後朝食兼弁当の中身を作る。それから諸々の事を済ませていつものように登校していた。

それで昨日も東横と帰り道に別れた所に差し掛かった。すると誰かがそこで待っていたわけよ。まあ東横だって事は一目瞭然で分かったんだがな？

「よう、東横！ 今日もいい天気だな!!？」

だいたいそんな感じで挨拶をした。俺の声で東横も俺が来た事に気付いたようで、顔をこちらに向けて来た。

だがなんだろうなあ……まだ会って2日ぐらいしか経っていいねえが、何だか様子がお

かしい。そんな疑問を頭の中で巡らしてたらよ……

「ふふ、おはよう星条くん。今日も元気なようで、お姉ちゃんも嬉しいっすよ。それじゃあ、今日も一緒に行こう?」

……あれ?

様子がおかしいのは俺の気のせいか?

大体いつもと同

じような受け返しだった。ああ……でもなんだ?

この歯がグラつくように浮

く感じ……

「昨日はあんな事があつたっすけど……1人でちゃんと眠れたっすか?」

「と、唐突だな……まあなんだ?

あれは俺の自業自得ってやつでもあるし……そ

れに東横からは元気もらったからな。だからいつも通り眠れたぜ?」

「そう……それなら良かったっす。お姉ちゃんの方は、星条くんがあの後また辛くなっ

て眠れなくなつてたらどうしようって不安だったっすよ?」

「い、いやあ……なんつうーか……俺そこまでメンタルの方は弱くないと思ってる方だ

し……」

「嘘はいけないっすよ星条くん?

昨日周りに人がいなかったとはいえ、道の真ん

中で泣いていたっす」

「うっ……ま、まあなあ……仰る通りです」

「ふふ、星条くんその正直な所、お姉ちゃんは嬉しいっす。でも……また悲しかったり

辛くなったりしたら、お姉ちゃんにすぐ言うつすよ？」
「えっ？」

あ、ああ……うん」

……やっぱりおかしかつた。というか最初の時点で気付くべきだったな。

(いつのまにか東横の一人称がお姉ちゃんに変わってやがる……それも、最後にすをつける癖は変わっていないが、どこかしら一般論で姉が話すような話し方をしているし、それでこう感じるのには変だが……お淑やかさまで感じちまつてる)

こうなった原因を作ったのは誰だ!?

はあくい俺でしたねチクシヨウ!!?

俺が昨日東横に姉ポジいけんじゃね?

って半分冗談半分本気で言っ

ちまつたから本人もマジで捉えてやがる……

(こ、これはどうみたって俺の所為だよな? 別に今の東横が変わって訳じゃあない

が……)

でもここで直さないと後々大変な目にあう気がする……

「な、なあ東横……さつきから気にはなっていたんだけどよ……」

「ん? 何つすか星条くん?」

「その……さつきから東横の話し方が気になるなーって思ってたんだが……」

「こはいっつその事ストレートに聞いてみるぜ!」

「なあーんだ、そんな事っすね?」

「そんな事って……」

「お姉ちゃんね……あの時星条くんを抱きしめていたら、ずつとこうしていたら、正直に思っただす。それでその後、星条くんが私の事を、母親か姉のようだって言っただす。姉の素質があるって言ってくれた時ふと思った。嘘の関係でも、星条くんの姉になれるんじゃないかって」

「で、でもあれは……」

「勿論、星条くんがいつものように私をからかっている事は分かっていたす。でも、それでも半分は本気で星条くんが言っているような気がしたすよ。だから……私は今日から貴方のお姉ちゃんになるす。貴方があの時、私に声をかけてくれた。それで貴方の顔を見たら、太陽のような笑みを浮かべてくれた。私の事を初めて照らしてくれた太陽だっただす。私にとって星条くんはそんな存在で、まだ2日しか付き合っていないすけど、それでもそう思ってしまった。だから……」

東横が近づいてきて、俺の首に両腕を回して抱き締める形をとった。つま先立ちをしてまで、俺と同じ顔の高さに東横も顔を置こうとする。そして東横の顔が俺の真横に来た時だ。

「私も……貴方にとってお姉ちゃんのような存在になりたい。太陽のような笑顔を持つ貴方

を傍で見守れる、そんな優しいお姉ちゃんになりたい」

……なんだろこの感情？

つうかさ……なんで最近、俺の心はこんなにも揺れ

動いちまうんだ？

1人暮らしは苦じゃなかった。でも……なんでか物足りな

かった。

そんな時にこんな言葉投げかけられて……元は冗談半分で言った事なのに……この子はそれを本気で捉えて、それでこんないい加減な奴の側にいたいと言い出して……そんなん急に言われて……

(でもその東横の言葉が……俺にとっては嬉しい)

「……バカ野郎」

「ふふ、星条くんにそう言われても、お姉ちゃんはなんとも思わないっすよ。寧ろばっちこいつす」

「はは……優しいぜ……東横はよ。本当にコミュニケーション絶つて来た奴には見えな
いぜ……でも」

「ありがとな。俺は今……側にそう言ってくれる人がいてくれて嬉しい」

俺も、東横を抱きしめ返した。この心に響く東横の言葉をもっと聴きたいと。そして

……

(もう俺は……大切な存在を手放しはしねえ!!?)

この時、俺は新しい人生をやっと踏み出せた気がしたんだ。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e

↓

8話
する!

R
—
1
5

ジョジョ、
入部を決意

あれから数日が経った……俺は学校のクラスにも慣れ、勉強については……前世が大學生というのもあつて余裕でこなしていた。

まあ小学生の頃なんて楽勝すぎて逆にやるのが面倒だったか？

一応大学生

になったら自分の興味のある事しかやってねえから、中高教育のブランクは流石にあるよなと思つて小学生の頃から復習してはいたさ。

そんな努力の成果もあつて、今の授業は楽に付いていける訳よ！

はあ？

ジョセフのようなキャラのくせに何で努力が嫌いじゃないかつ

てえ？

そんなん決まつてんだろお？

俺が元々勤勉な性格だった

だけのことよ！

ていうか今物語の中だからそんなメタイ質問はやめやがれ!!

？ どつかのカエルのごとくメメタア〜つていう効果音着いちまうからよ!!？

コホンツ……それはさておきとして……俺はあれからもオンラインの麻雀室に入つて麻雀部の方々と打っている。それなりに俺とやっているせいか、日を追うごとに皆強くなっているのよなあ……

(まあそこんところも考えて日々地道にこうやってる訳だが?)

んで東横もいつも俺と一緒に麻雀してる。オンラインの時もそうだし、前あったように朝早くに来てからもやってる。

今の俺の日常はそんなところで、今の所何か特別な事があった訳じゃあない。

(ああ……でも強いて挙げるとするなら……)

俺が泣いた翌日以来……東横は学校にいる時や登下校中、俺の姉のように振舞っていることかな。今この瞬間でも……

「星条くん、最近少し暑くなつて来たつすね」

「そうだな。これも環境汚染のせいだな……全く人つて奴は……確かに便利な物を創るのは良いし、俺もそれを利用してゐるからこんなこと言うのは矛盾しているが……自然環境大事にしやがれてんだ……」

「確かにそうつすよね……でも、暑かつたら暑かつたでお姉ちゃんとしてもその状況は有効活用できるつすよ」

「ん? それつてどう言う意味だ?」

「例えば夏になると半袖になるつすよね?」

それで同然汗もかくつす。女からしてみれば汗臭さとかそう言うのは嫌なところだけど、場合によっては肌や下着が透けて見える場合もあつて……それを星条くんにあつげらんと思せびらかしてメロメロにす

るっすよ!」

「……聞いた俺が馬鹿だった。ていうか、そんな恥ずかしけしからんそんな状況見るもんかよ!!?」

「でも星条くんの顔……まんざらでもなさそうっすけど?」

「そ、そんなん……恥ずかしいからに決まってんだろうが!!?」

「ふふ、冗談っすよ。もう、星条くん本気にして……でもお姉ちゃんそんな星条くんの反応が見れて嬉しい!」

「うわっ!!? ちよっ!!? こんな体勢で抱きついたらっ!!?」

「抱きついたら?」

「そ、その……や、柔らかいシユークリームが……」

「お昼食べたばかりなのに、まだお腹が減ってるすね? ふふ、食べ盛りな元気な

子……お姉ちゃん好きっすよ。だから……た〜んとお食べ?」

「ぐわあ〜っぷ……い、いふいあ”あ”あ”っ!!? (い、息がああっ!!?)」

「ふふ……いっばい食べるっすよ?」

まあそんな感じで……東横が完全に俺の姉ポジになって、振る舞いもそんな感じになつてた。いやあ……俺も驚いてるよまじで……

(でもさ……凄く嬉しいんだ。こうやって誰かと一緒にいれるってさ……普通だと思っ

ても、よくよく考えてみれば奇跡みたいなもんで……)

こんな事前世でも無かったぜ?

女の子に膝枕されながら抱き締められると

か……

(つて……いやいやそうじゃなくて!

でもこうされてると落ち着くもんだ)

そう思いながらもいつものような光景になりつつある昼休憩の時間は過ぎ去っていく。

それで今日も既に放課後になり、俺が麻雀オンライン室に行くのもいつもの日課となっていた。これまで麻雀部の人達と何回試合したことやら……まあ全部俺が買ってるけどな?

でもあちらさんも中々にやる様になってきた。これに対してはいつもの楽しみで見てるよ。時より危ない場面もあったし……

(でもそれが楽しくて仕方がないんだよなあ!)

よし決めた! この人達の意味も十分に見させてもらったし、確実に上から目線に思われるだろうが、俺としても直接会って打ちたくなってきた!

そうと決まったら早速アポ取るぞ!!?

【Joestar】かじゆさん、かまぼこさん、むつきーさん。少し折り入って話したいことがあるんですが良いですか?

【かじゆ】ん？ どうしたんだい？

【j o e s t a r】ええ、前にあなた方が言ってきた感についてですが……残念ながら今日はそちらに行く事は出来ません。

【かまぼこ】わはは、それはどういう意味だい？

【j o e s t a r】簡単に申し上げるなら……私はそちらに行くための準備を今はしていませんという事です。ですので……明日そちらに赴かせて頂きます。

【かじゆ】っ!!？ という事は……

【j o e s t a r】ええ、私は正式にあなた方の部に入る事を決意しました。ここまで時間がかかってしまった事をどうかお許し願いたい。

【かじゆ】いや、謝らなくても良いさ。現に私達は君に麻雀の腕を磨いて貰ったし、諦めないという心意気も教えて貰ったからな。だから礼を言うのはこちらの方だ。

【j o e s t a r】……ありがとうございます。では翌日の放課後に、そちらへ向かいませう。では、今日は準備もあるのでここで失礼します!!？

そして俺は麻雀したから退出した。

「よし……じゃあ俺は早速帰って準備の方に取り掛かるとするか」

「ふふ、星条くんなんだか嬉しそう」

「ああ。やっと俺も決心が付いたからな……そしてあの先輩方も、俺の無茶な条件によ

く付き合ってくれたと思ってる。だからその感謝の意味も込めて、これから準備に取りかかるわけよ!」

「ならその準備を、お姉ちゃんも手伝って良い?」

「えっ? ああ……まあ良いぜ。そう言えば東横はケーキとか作れるか?」

「ケーキ? うーん……デザートは使った事はないけど、星条くんが教えてくれ

ればお姉ちゃんも頑張るっすよ!!?」

「よし! なら帰る前に店に寄って行くか!!?」

「お姉ちゃんも当然それに付き合うっすよ! それで星条くんの家まで一緒に行

くっす!!?」

「なら善は急げだ! 帰ろうぜ!!?」

だが俺はここで気付かなかった……

東横が俺の家に来ると言う事は、俺の今の現状を知られるという事に……

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e

↓

病 9話

s
i
d
e

東
横

尊
敬
さ
れ
る
臆

「ベーキングパウダーに生クリーム、卵に薄力粉つと……それで後は……」

いかにも主婦か女の子が買い物をしているかのような材料を口に出しながら籠の中に入れてるのは、今日私達に通っている麻雀部に入部を決意した星条くん。

実に楽しそうに買い物をしていた。全くそんな事想像できないと思うっすけど、案外星条くんには女子力というのがあるのかもしれないっすね。

(しかも毎日持つて来るお弁当も自分で作つて言つてたし……)

高校生でしかも男の子なのに毎日作つて持つて来るなんて、普通の男子高校生ならできなと思うっす。まともに台所にも入つてないと思うっすよ？

でも星条くんはそれを普通の事のようにやっている……星条くんに初めて会つて、そしてお弁当も食べさせてもらった時……私は彼の事を凄いと思つた。それと同時に……少し悔しくも思えた。

私は女の子なのに……手料理をまともに作つたことがない。昔から人との関わりを絶つて来た私は、昼も当然一人で食べていた。親からお昼代をもらい、それでパンを食

べて昼を過ごししていた。

周りにも私と同じ様にお昼にパンを食べている人達はいたつすけど……皆誰かといっしょに食べていた。正直それに対しては憧れたつす……でも私の体質上、それは夢の様な話だった。

でもあの日……私を認識できるあの人が現れて、お弁当まで分けてもらって……

(それであの人の笑った顔……)

私の薄い影すらも照らしてくれたあの人の笑みは、私を変えてくれた。

入学式が終わって、星条くんと一緒に帰り道を帰った後……すぐに家に帰って……

「ただいま！ お母さん！ お願い事があるの!!?」

家にいる時そんなに大きな声で親と接した事が無かったために、最初は驚かれた。でもそれは最初だけで、それから私は私のお願い事も聞いてくれた。

「それにしても、桃子がお弁当を作りたいなんて、何かあったの?」

「そ、それは……」

そんな私の反応を見たお母さんはニヤついて……

「桃子……まさか気になる子でもできたのかしら?」

来たのね!」ニヤニヤ

ふふ、とうとう桃子にも春が

「ちよつ!?」 お母さん!?!?」

「ただいまー……ん？ どうしたんだ？」

「貴方！ とうとう桃子にも春が来たのよ!!？」

「な、なんだと!!？ ど、どこのどいつだ！ 私の桃子は渡さんぞ!!？」

「お、お父さんまで!!？ うう……カアツ

そんな事がありつつも、私一人でもお弁当をなんとか作れる様になった。そして学校2日目の時には、私も朝早く起きてお弁当を作って持って行った。ただその時……

「おっ!!？ 桃子がお弁当を作っている……まさかお父さんのためにか!!？」

「いや、それは違うよ？」

「なっ!!？ はっ！ さては昨日言ってた……」

「……」ポツ

「も、桃子おおっ!!？ 冗談だと言ってくれえー!!？」

家を出る時になっても、お父さんはしつこく追求して来た。私は星条くんを待たせるわけにはいかないと思つて早く出たかったのに……結局お母さんがお父さんにOHANA SSI するために引きずって行くまで家を出れなかった。

(でも……久しぶりに親子とちゃんとした会話ができたっす)

それからというもの、私は親とコミュニケーションをよくとるようになった。それが

普通の事だとは思いつすけど……それでも私としては変わったかなって思う。

そして……

「よしよし……これでケーキの材料は揃ったな。でもなんだろうなあ……なあくんか足りねえんだよなあ……」

「ねえ星条くん。お姉ちゃんプリンも食べたいなあ?」

「……分かったよ。なら卵とか諸々追加だな」

「やったー! 星条くん大好き!」

「ぐわあ!!? と、東横! いきなり抱きついたら危ないぞ!!?」

「ふふ、照れてるつすねえ? そんな所が可愛いと思うつす」

抱き着きながら星条くんの横腹をツンツンとつつく。

「よ、横腹をつつくな!!? 横腹はっ……」

「まさか苦手なんすねえ? ふふふ、また星条くんの事が知れたつす」

「そんなの別に知らなくても良いだろうが!!?」

やっぱり星条くんと一緒にいると楽しいつす!!?」

s
i
d
e

o
u
t

よお！

星条承悟だ!!?

そういえば久々に下の名前を名乗った気が

すんなあ……。

まあそんなのはともかくとしてだ！

俺は今東横と一緒に俺の家に向かつてる

ぜ！

これから、明日麻雀部に入部するための手土産を作ろうって魂胆でお菓子を作る事にした。それで東横も、自分で手伝いたって言ってきた。

まあ1人じゃなくて、俺と2人で作るし、東横の料理……弁当しか食べたことはねえが、それでも美味しかった。だから、お菓子作った事がなくても東横なら教えればすぐにできるだろう。

そんなことを考えながら、着々と俺の家に向かっている。

「ふふふ、星条くんの家に行くのお姉ちゃん楽しみます！」

「東横にとつては、友人の家に行くこと自体初めてのようなものな」

「そうっすよ！」

それも最初が星条くんの家なんて!!??

ドキドキするっす

よ!!??」

「まあ確かに……初めて友人の家に行く時つてのは、ドキドキするもんかもな」

「そうっすね。でもお姉ちゃんがこうドキドキしているのは……星条くんと長くいるという時間を共有できるからなんだよ？」

「っ!?」

そ、そんな事を急に言われたら……」

「どうしたの？」

まさか照れてるのかな？

だとしたらお姉ちゃん……嬉

しいっす♡」

東横が俺の左腕に抱き付いてくる。東横特有の柔らかい感触も同時に感じて、それだけで身体が熱くなってくる。何で東横は、こんな大胆な事が出来るのだろうか……

（た、確かにいい？）

俺としても嬉しいところではあるけどさ……）

女の子にここまでされるといふのは、前世含めて無かった。確かにこれまでは友人関係は大事だと思つて、男女関係なく平等に……そして大切に接して来たつもりだ。今だって、それは変わらねえ。

でも……東横の様なスキンシップをとる子は今までに会つた事がない。

最初は……席が隣だったことから始まった。それで本人の体質故に、俺だけが完璧に本人を認識できる事から友人関係がすぐに構築できて、そして今この状況にある訳で……

（でもよくよく考えると……高校に入つてからの交友関係で一番長くいるのは東横なんだよな……）

そうとなると……今まで俺がやって来た様な交友関係の平等さというのが傾いていると感じてしまう。

だが……友人は誰一人としてお粗末にしていない事だけは事実だ。俺には……東横

の様に何かを切り捨てるなんて事は……多分怖くてできない。関わりを持ったのなら……大事にしたい。

そんな想いがある。

それから程なくとして俺の家が見えて来た。あの家だと指を指して東横に教えたら、年相応でなくはしやいでいたな！

でも俺としては、ギャップというものは良いものだと思う。自分の思い込みが発端ではあるが……その人の思いがけない様な姿を見た時、新しい価値観というものは必ず生まれるだろう。

それが良いものか悪いものかは……感じる本人次第だが……な。

それで玄関の前によく着いた。何故かいつもより時間がかかったとは思ったが……

「はわく……なんか緊張するつす……それに星条くんの親とも初めて会うかもしれな

いつすし……何だか心臓が飛び出そうっすよ!!？」
「……………」

ああ……俺は忘れちゃってたよ……その事を完全に忘れていた。東横は確かに影が物凄く薄い。だが……だからと言って親に完全に認識されないと言われれば……そういう訳じゃない。

確か東横が昼に弁当を持ち寄った日からだったか、親ともよく会話をする様になつたって言っていたな。そして日に日に、親とコミュニケーションを取る時間が長くなつたんだと。

なんか俺のおかげだつて言つてた様だが……俺は何もしちゃいない。ただ……東横がそうしようつていう気持ちがあつたからこそだ。

対する俺だが……周りには明るく振舞つて来たつもりだ。そして大切にもして来たつもりで、そこに嘘なんてこれっぽっちもない。

でも俺には……唯一近くにいるはずの親がない……俺が幼いながらも前世の記憶を持つているが故に……そして常人では持たない様な能力を持つているが故に……離れちゃった。ずっと小さい時に……

「ただいまー」

「お、お邪魔しますー！」

身体は……そんな俺の心情を御構い無しに自然と動作する。遂に東横を……友人を家に招き入れちまった。

「……あれ？　物音一つ聞こえないっすけど、もしかして星条くんの親は留守なんすかね？」

「……」

俺はその問いに答える事なんてできない……

そんな中でも俺と東横は俺の家のリビングへと進む。

そして東横も……自分の体質故に段々と気付きだした。

「……これって……まさか……星条くん？」

関心をつく様……東横が俺の顔を見上げてくる。その瞳には……悲しさが垣間見えた様な気がした。

それでよ……ここまで気付かれてしまったのなら、隠す事なんてもうできない。隠していたわけではないが……な。

「すまない東横……本当は隠すつもりなんて無かった。だから今正直に言う。俺には……家族がいないんだ」

そこからは、俺に起きた過去を隠さずに話した。東横は依然悲しさを含んだ瞳をしな
がらも……俺の話を遮らずに最後まで聞いてくれた。

「……そうだったんすね」

「ああ。隠すつもりは無かった。でも俺にとつては……今この時が楽しくてよ……だか
らそれを壊すまいと、そう考えるとこんな事言えなかつた。俺は……本当は臆病なんだ
よ。臆病だから、周りにはああして明るく振る舞うしかなくて……それで……俺から何
かが離れていってしまうと思うと怖くて……」

俺の口から次々と言葉が溢れ出してくる。今まで押し殺して来た本当の思いが……

言葉として出ながらも次々と消えていった。これまで生きて来た中で、欠けていた時間を代弁するかの様に……

「ははっ、いやすまねえ！」

ちよつとどこかかなり辛気臭くなつちまつたけど、

今日はサプライズを作るためにわざわざ東横にも来てもらったし、時間も無駄にはできねえ。つう訳で早速手をつけるとするか!!？」

そう言つてリビングのソファから立ち上がるとした。でもそれは遮られた。

目の前が真つ暗になった。一瞬のことだったから、なんかの弾みで倒れて気を失つちまつたのかなつて思った。

そう思ったんだが、感覚としてはちちゃんと生きている。俺の体を優しく包み込む感触と温かさ……そして……

「ずつと……寂しかったんすね」

そんな優しい響きが俺の耳に入り込んできて……それが俺の心の中にも入り込んで来る。東横がそう言つたんだつてすぐに分かった。

本当は……自分の過去を語っている時悲しかったんだ。でも……東横にはこれまでさんざん迷惑をかけてきた。さんざんじゃねえかもしれないけど……俺からすればそんな感覚があつて……

だから……話している時は、そんな素振りは見せていないと思う。でもそれが、東横

にとつては寂しく見えたんだろう。自分の体質故に、俺の心の内も見えちまったんだと思う。

「星条くんは……周りにはいつも明るく振舞っているし、気さくに話しているからとても凄いなって思う」

「……俺は何も凄くなんかない。ただ……臆病だから……」

「星条くんが言う様に……確かに臆病なのかもしれない。でも私は……」

「お姉ちゃんは、そんな星条くんだから今の自分がいるし、それに星条くんと会えたんだよ？」

だから自分が臆病な事は、星条くんが思うよりも悪い事じゃないんだよ？

だから……」

体を包み込む温かさが増して、心に響く声も……この前あったあの時の様に心の奥底に染み込んでいく。

「お姉ちゃんは貴方の事を尊敬する。自分の事を臆病と思つていても、周りに明るく振舞っている貴方の事を尊敬する。そして……そんな星条くんに会えてお姉ちゃんは幸せだよ」

「っ!?？」

……うう……」

「我慢しなくても良いの。泣きたい時は泣いて？」

お姉ちゃんが、全部受け止めるっすから」

「ぐう……うわあああああつ……!!？」

それから泣き止んだのは数10分経った時だ。女の子の手前でまた泣いてしまつて、自分の事を情けないと思つてしまう。情緒不安定にも程があるだろうつて事も思つちまう。

そんな中でも東横は、俺の事を優しく抱きとめてくれた。泣いている間、ずっと俺の背中を優しくさすつてくれて、頭も撫でてくれた。

その時間が……俺にとつてはとても安心できた。もつとこうしていたいと思えるくらい、愛おしい時間だったんだ。それと懐かしくも感じた。

まるで自分の親にそうされている様な……上手くは言えないが、ともかくそう感じたんだ。別に東横が俺の親の様だつて言ってるわけじゃねえぜ？
それは分かつて欲しい。

まあそれはさておきとして、そのまま東横に抱きついているのも良かったんだが……今日はそのために東横を招いたわけじゃなくて、明日麻雀部にサブライズをするために手伝いに来てもらったんだ。だからそこからは東横と一緒にケーキとか作ったり、他のお菓子を作ったりした。

正直……あのまま抱きついて時間を過ぐすというのは、俺としてはありだった。だが……

(途中から気付いてまってたんだが……抱きついていた時に俺の顔に当たるあの柔らかい感触……)

「星条くん、こっちは星条くんの言った通りにやつておいたつすよ！
後待つだけだし、洗い物も殆ど終わつたつす。だからあ……」

ダキッ

東横が俺の左腕に抱きついて来た。そしてまたこの柔らかいっ……？

「ふふふ、星条くんのその照れた顔……可愛いつすよねえ♡
またさつきみたいにな

星条くんを抱きしめたいつす」

……今日はなすがままにされても良いかと正直……正直に思った。

そして翌日の放課後……

「ここが麻雀部の部室か……」

「いよいよっすね」

「ああ、楽しみだけ。これからの学校生活……どう変わって見えるのかな」

「お姉ちゃんは、星条くんと毎日こうして話しているだけで満足っすよ？」

「……さて行くか」

「ちよっ!?」 お姉ちゃんの事無視しないで欲しいっす!!?」

そんないつもの……俺としてはいつもの様に、隣の東横とそんな会話をしながら麻雀

部の扉をくぐった。

「ようやく……ようやく来てくれたね」

「ワハハ、待っていたよ。j o e s t a r k u n」

「な、なんだか想像していた人とは違う雰囲気はしますけど、よろしくお願いします！」
出迎えてくれたのはその3人で、薄紫色のロングヘアでどこことなく大人びた人と、赤いショートヘアで失礼ながら何も考えていない様な顔の人、そして髪を後ろでポニーテールでまとめた普通そうな人だった。

「入学初日のオンラインからお世話になっていきます。私はハンドルネーム「j o e s t a r」こと、星条承悟です。入部した目的は、私……いや、俺自身が楽しく学校生活を送ることと、先輩方を全国に導くためです!!？」
よろしくお願いします!!？」

「そして私は「g u e s t」の東横桃子と言うつす。先輩方よろしくお願いしますつす」

「ああ、よろしく星条くん。私達は君を歓迎しよう！」

……ん？
ありい？
なんかおかしくね？

(つて……まさか東横の事が見えてない!?!?)

急いで俺はある事をして東横を先輩方に認知させた。案の定先輩方は驚いていたが……

「ふふ、先輩方にも見えてない事はこれで分かったつすね。オンラインでは結構点数は

取られてはいたっすけど、実際に麻雀したらどうなるのか楽しみっすね」

「え、ええつと……君は？」

「さっきも自己紹介はしたっすけど、私の事を認知できていなかったみたいっすからもう一度するっすね」

こうして東横も自己紹介は終わって、鶴賀学園の麻雀部は5人になった。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e

↓

10話

依存しているのかな……

入学式から数えて早1ヶ月……5月の最初だ。んで、麻雀部に入ったのが大体2週間前で、先輩方の名前と顔は一致させた。まあ、3日くらい経つと自然と覚えるよな。なんせ人数少ないし……

ああそれともう1つ、なんか部長の幼馴染の妹尾先輩という方が入って来た。麻雀は初心者の様だけど、その代わりにビギナーズラックが半端なく高い。俺もそのせいで何点か取られたが……その代わりに次の時にはその倍をかつさらってやったぜえ！

なあにい？

大人気ないだつてえ？

はん！

こちとらまだ

子供なんぞなあ！

大人気ないなんて言われてもなんとも思わねえぜ！

ああ……たしか精神年齢は30代後半だったな……そう見方を捉えれば大人気なかったか？

まあんなことはともかくとしてだ。一応これで全国大会は、女子の定員も揃ったし、俺がいなくても普通に出れるって訳だ。

だけど……加治木先輩はこう言ってくれたんだ。俺がいてくれたから私達は前よりも上手くなったんだと。だから俺も一緒に参加して欲しいってな。

確かに数年前から男女混合でも団体には出れるようになった。だがそれは別に、絶対に男や女を入れろという訳じゃねえ。女子だけなら女子だけでも良いし、男子だけなら男子だけでも良い。

それなら普通に男女で分けてやれば良いという結論になるだろうが……昨今の麻雀界は結構特殊で、男子よりも女子の人口が圧倒的に多い。比率でいうと男女3:7という割合だ。

だからこそ麻雀協会は、できるだけ多くの男子雀士を育成するという方針を取り、数年前からは男女混合で団体戦に出てもありにしたそうだ。

まあ？

男女混合のチームは少ない方だろうよ。そして混合で出場する場合、男

女の割合で多い方の団体戦に出る事になる。だからもし俺が団体戦に出る時は、必然的

に女子の方に組み込まれる。

混合となると、チーム数は必然的に多くなりそうだが……それは都会に限つての話で、田舎に近いここではあまり多くないだろう。

それにこれも同じく数年前からだが、定員十一人の人員を団体戦に参加させる事が可能だ。だから、一回戦と二回戦でメンバー交代ができる仕組みが備わっている。まあこれはチーム次第なんだが……

そんな訳で、加治木先輩は是非俺にも出て欲しいという。他の先輩方や東横も同じ様な考えなのか……一緒に団体戦に出たいと言ってくる。

……正直ここまで言われちゃあ、断るなんて俺にはできねえからよ。だから俺も先輩方と一緒に出来る事にしたんだ。

それを了承したのがついこの前だ。それから朝は東横……そしてたまに先輩方と一緒にオンラインで打つて、昼はいつもと同じく東横と一緒にのんびり過ごして、放課後になるとまた先輩方と一緒に打つ。これが日常になっていった。

因みに自動卓は家から部屋に移動させておいた。今までの活動は手で混ぜたりしていた様だから、時間が少なからずかかっていた様なのだが、俺が持ってきた事で少しでも時間短縮や能力向上に繋がったら良いなあとは思っている。

そして昼に東横とのんびり過ごす件についてなんだが……

「星条くん、はいアーン♡」

「あ、あーん」

昼と一緒に食べる時は、大体の確率で東横が俺にアーンor俺から東横にアーンを所望してくる。そして食べ終わった後は……

「さあ星条くん、お姉ちゃんが膝枕をしてあげるつすよお！」

「い、いや……いつもして貰うのは流石に悪いし……」

「うーん……それじゃあ今日は、星条くんの肩に寄りかかせて貰うつすよ」ピトツ

「~~~~~っ!?」
／／／

と、こんな風に東横が甘えたり、俺に膝枕したりしてくる。正直この感覚は今でも慣れねえ……だが、不思議とこの日常が俺は気に入ってるんだよな。だから嫌だと思わないぜ。

それで今日の活動の時の話になるんだが……

「来週とある高校の麻雀部と練習試合をする事になった。団体戦として公式非公式別で初になるが、気を引き締めていこう。これがその高校の公式戦でのデータだ。皆1回は読んでおいてくれ」

加治木先輩が相手高校の和了牌やそれぞれの持ち牌のデータが記された紙が配られた。俺もそれに目を通していく。

（ふくん……大体平和、断么九、対々和が多いな。それに集める牌も偏ってやがる……これは上手いとこ突けば相手の点数を奪えるぜ！　ただなあ……）

この練習試合は……俺も面白そうだと思ってるし、参加したいとは思っているのよお……だが……だがなあ……

「ここで何か聞きたいことはあるか？」

俺がそう思っていたタイミングで加治木先輩がそう言ってきた。だから……申し訳なく思いながらも挙手させてもらった。

「その……何というかですね……非常に申し訳ないんですが……」

「ん？　　どうかしたのか屋条？　　なにかわからない点があったかな？」

「いえ、そういうわけじゃないですよ……ただ……」

「ただ？」

「ただ……その日は私用があつて……学校を休まなきゃいけないですよ。だから俺は参加できそうになくて……」

「……プライベートな事を聞いてすまないが、何の用かは聞いても良いかな？」

「全部は言えないんですけど……アメリカに行かなくてはいけない……」

「あ……アメリカだと？」

「ええ……なので来週のその日は、できれば行きたかつたんですけど参加できません。」

すみません……」

そう……その日はアメリカでしなくてはならない行事がある。別にアーティストのライブに行くわけじゃねえ……ただこれは数年前から……俺が中学生の頃から必然的に参加しなきゃいけないものなんだ。だから先輩方や東横には申し訳ねえ気持ちでいっぱいだ。

「……そうか。分かったよ。これ以上は聞かないが……君の事だ。そこに嘘はない事ぐらい知っているつもりだよ。だから……気を付けて行ってきて欲しい」

「っ!!? ありがとうございます。部長」

「ん? なんか最後に変な事を言わなかったか?」

「いえ? ただ、ありがとうございます、部長と言っただけですが?」

「……星条くん、それはわざとかい?」

「さあ? 俺はそんなつもりで言ったわけではないですよ?」

「嘘をつくな! 君がわざと私にそう言ってくる事は明らかなんだぞ! それ

にこのやり取りも今月に入って何回めだと思っっているんだ!!?」

「えっ? いえ、俺の感覚では今月に入って初めてじゃないですかねえ?」

まあ俺が意識してないとしたら3回くらいじゃあないですか?」

「惚けるな! 既に10回は軽く超えているんだぞ!!?」

「ワハハ、そうだよ星条くん。それに部長は私だぞ〜?」

「えっ? いやいや、どう見ても蒲原先輩が部長には見えませんよ。何

言ってるんですかほんとにい〜」

「いやいや、これは事実だぞ〜?」

「んなわけないでしょ? 部長は加治木先輩ですよどう見たって?」

「私もそれには同感すね」

「わ、私も前からそう思ってます……」

「わ、私は最近入ってきたばかりですけど……加治木先輩が部長だったんじゃないんですか?」

「き、君たちもか?!?」

「あつはつはつはつ!!?」

「星条くん! 元はと言えば君が言い出した事だろう?!? 何を笑っているん

だ!!?」

「いえ、ただ単に面白くてですね。いや〜、生きていると良いことってあるもんですよね?」

「最後にそんな良さそうな言葉で締めようとするな?!?」

「これもいつも通りっちゃあいつも通りだな! まあなんの変哲もなくて面白げ

もない漫才……で訳でもねえが、いつもこうやって何かあるごとに誰かをからかったりしてる。

さっきのようなしんみりとした雰囲気は……俺が作ったようなもんだが、それでも場の空気を和らげようとあぁやってる。

でもその変哲も無いただの漫才まがいな事でも、周りがこうやって笑みを浮かべてくれたり笑ってくれたりしたら……俺としてもいくらか気が楽になるもんよ。

(それに……今は俺の事を心配してくれている人がいるからな。それだけでも俺は助かる)

来週はアメリカに行っちゃまうが、皆も練習試合は頑張つて欲しい。そのエールを心の中でしながら、今日も皆で楽しく日常を過ごした。

s i d e

東横

1週間後……

星条くんは昨日アメリカに行ってしまった。私は星条くんの用事が気になって気になって仕方がなかったんすけど……でも私は聞かなかった。そうしてしまう事が……星条くんにとっては迷惑だと思ってしまったから、だから聞かなかったす。

でも私は心配もしたす。星条くんの家庭については……実際に家に行ってるし本人からも聞いたから知っているす。でも、その年で……しかも一人で遠い異国に行くのは……私からしてみれば考えられない事で……

それに、星条くんは昨日アメリカに行つたばかりだというのに……何故か星条くんが近くに感じられないと不安で仕方がなくて……授業にも身が入らなかつたのは事実す。でも練習試合の時は、星条くんが旅立つまでのギリギリの時間を私達の練習や戦略に充ててくれた。だからその時はいつも通りにできて、試合も相手と大差をつけて勝てたす。

でもそれも終わってしまえば、意気消沈するのも早かつたす。そして今日もそんな感じで過ぎて行つたす。

今はもう家に帰っていて、リビングでぼおつとしていた。

(はあ……星条くんがいないと身が入らない……)

いつの間には私はこうなってしまうのだろうか？ 星条くと会う前は……

例えば人と1日会話をしなくてもいいこんな気持ちにはならなかったのに……

(それなのに……なんで私は今こんな気持ちになっっているんすか?)

そう考えてしまえば話は簡単だった。私は……

(私はいつの間にか……星条くんに依存していたんすね……)

依存……この言葉は、他の人にとつてはどう思うんすかね？ 他の人から言えば

……多分悪い事だつて思うかもしれないす。

依存してしまえば……その依存先を頼つて墮落してしまう……。逆に依存させてし

まう者は……依存させる側を甘えさせてしまう……

私も……そうなのかなと思つてしまうつす。私は星条くんと一緒にいると安心して

しまう。そして……彼とできるだけ時間を共有したいと思つてしまう。その自分の過

ごし方が……悪い方向の依存と思えてならない。

(私は……星条くんの事を考えずに……ただ自分勝手に彼の事を求めているだけなんす

かね……)

そう思うと……途端に涙が溢れてきて……それでいつの間にか両手で顔を覆つてい
た。何故か悲しくて……それで自分が情けないと思つてしまった。彼は……私が勝手に
に彼のお姉さん役をやっているのを、いつも困った顔とか照れた表情をしながらも明る

く接してくれる。

でもそれが……彼にとつて重荷になっていたら？

(私は……馬鹿つすね……)

そんな事……考えもしなかった。でも彼と……星条くんと少しだけ離れただけで、私
が彼に依存していると思つて……そしてそれが……星条くんにとつて迷惑なんじやな
いかと思つてしまつて今涙を流している……

私は……星条くんにとつて優しい人ではなくて……ただ依存しているだけだったん
すね……

それが悲しくて……情けなくて……今はただただ泣くことしかできなかつた。

それから数時間が経つた。両親は……今日はどちらとも用事があつて帰りが遅い。
だからリビングで1人で泣いていても、ただ私のすすり泣く音が響くだけだった。でも
ここで泣いていても仕方がないと思つて、気分転換に新聞を読んでみた。時刻は9時
なる前で、テレビ欄で何かやっていないかを見た。

(……アメリカで開催される麻雀世界大会の生中継?)

私はこれが気になったので、テレビをつけてその番組をやっている局のボタンを押し
た。

『さあさあ！

今年で4年目となる麻雀世界大会！

私は今その会場に来てい

ます！　　全国から予選を勝ち抜いて来た猛者達が集う全国大会……そこに男女

や年齢や学歴諸共関係なし!!?　　全てはどれだけ麻雀の腕を持っていて勝者

が決まるこの大会!!?　　それでは出場選手を紹介していきましよう!」

そして選手の紹介が順に行われていった。そして紹介された人からクジを引いていく。そして空欄だったトーナメントの欄が次々と埋まっていった。そして残り1つの枠になった時……

『お待たせしました!　　ここで本大会3年連続の覇者の登場です!!?』

中継している人がそういった途端、選手の出場口から物凄い量の白い煙が流れて来た。出場口はそれで見えなくなつた。

『年齢、性別、学歴一切非公開!　　これは大会本部に問い合わせても答えてくれま

せん!!?　　しかし!　　名前だけは私達は知っています!!?　　3年連続

本大会の覇者……そして今宵行われるこの大会で4連覇を成し遂げ、麻雀会の伝説を作つていくのか!!?　　それでは紹介しましよう!』

白い煙が徐々に晴れていって、そこには一般の人よりも大柄の人がシルエツトで現れていた。そしてその人の名前は……

『3年連続覇者!!?　　ジョルノゴ・ジョースターさんです!!?』

……その名前を聞いた時……私は何故か星条くんの事を思い浮かべていた。

『彼は、何故か言葉を発しません。障害を持つているのかどうかさえも私達には分かりません！　ですが！　彼の麻雀の腕だけは、この会場にいる人ならば誰もが

知っています!!?　そして今宵もその奇跡の一手を私達は見る事が出来るのです！　しかしここに集まった選手達も皆予選を勝ち抜いて来た猛者達です！

その内の1人が、彼の連勝記録をストップさせ新たな王座を打ち立てるのか!!?

それはこれからやってみないと分かりません。しかし！　この試合会

場に来ている人！　そしてこの中継を見ている全ての人の記憶に！　こ

の白熱するであろう戦いの記憶を植え付ける事でしょう!!?　それではそろそ

ろ1回戦目の火蓋が幕を開けます！』

その後は簡単にルールが説明された。東場のみの4局で次の試合に臨めるか決まるもので、萬子、筒子、索子それぞれ1つずつに赤ドラを加えるものとする。ただし、場風牌と自風牌を重ねて2翻としてはならないというルールだった。ただし、場

そして私はテレビ画面を凝視していた。正直レベルが違いすぎて、どの予選を勝ち抜いて来た選手もとても参考になつたし、美しいと思つた。でもそれよりも目を引いたのが……

(……やっぱりのジョースターって選手……星条くんと打ち方が似ている)

仕草は別人に見えた。でも打ち方は……彼そっくりだった。そして……

『いいで……ここでなんと、なんと!!?』

ジョースター選手がロンしたあつ!!?

そして役は……っ!!?』

ま、萬子の九連宝燈だあつ!!?』

萬子を

出しているにもかかわらずこの引き運!!?』

そしてロンされた選手はハコに

なつてしまったあ!』

よつて……第4回麻雀世界大会勝者は!

ジョル

ノゴ・ジョースターさんです!!?』

その大会で優勝者はジョルノゴ・ジョースターさんになり、中継している人も最後に思つた感想を言つていた。その時下の方にジョルノゴ・ジョースターからのお知らせと書いていたから、番組を変えずにそのまま待つていた。

そしてCMの次に映つたのが、スケッチブックを持っているジョースターさんだつた。そこには文字が書かれていて……

《今日の試合会場、並びにテレビを見てくれた皆様に感謝いたします。そして今回この大会に出場してくれた選手の人達にも……一緒に打つて楽しかったという事を伝えたいです》

英語で書かれていたものの、字幕があつたので意味は理解できたつす。そしてジョースターさんはスケッチブックを一枚めくつた。

《さて、今回お知らせしたいのは、私個人で提案したものです》

《来週の5月18日土曜日、私は日本の長野の地にて大会を開催するというものです。

これは初の試みというのもあり、参加できる地域の人は制限させてもらいますが、男女等の制限、年齢や学歴も制限はありません。ただ……麻雀が誰よりも好きだと思ってる人、私と打ちたいという人は、誰であつても歓迎します！

応募方法は、インターネット上に掲載していますので、もし打ちたいという人がいれば参加して見てください！

そして最後にも言いますが、今回私達の勇姿を見てくださった方に、本当に感謝しています。それでは……またいつか会いましょう》

最後にはジョースターさんが手を振って、その番組は終わった。

それが終わった後、私はすぐにインターネットで応募方法を検索した。応募についてはまず、自分の名前と住所を入れる。最初はそれだけ。次に出た欄に、その大会に出るために予選が開かれるというものだった。その予選の日と都合のいい日時を選択して決定ボタンを押した。

それが最後の選択欄で、後から確認画面が出て来た。これで同意するなら、1番下の決定ボタンを押して予選に出場登録完了となる。そして私は、決定ボタンを押した。

「……あの人が本当に星条くんなのかどうか……会って確かめたい」

さつきまで抱いていた感情はもう消えていて、今はそれだけしか頭になかった自分がいた。

t
o

s
i
d
e

b
e

o
u
t

c
o
n
t
i
n
u
e

↓

11話

ふざけんじやねえ!!?

やあ皆!

俺の名前はジオルノゴ・ジョースター!

先週行われた麻雀世

界大会で4連覇を成し遂げてきたところだぜ!!?

はあ?

お前は誰だつてえ?

おいおい……まさかこの物語でこんな話し

方する奴他にいねえだろ?

俺だよ俺!

ああ!?

分からねえつてえ!!

? 逆に今時そんなの通用しないつてえ!?!?

……ああもう分かったよ。最初からちゃんと言えつつつてんだろ?

は

はい、鶴賀学園1年の星条承悟です。この前麻雀世界大会でジョルノゴ・ジョースターとして参加して4連覇してきました。

……これで良いんだろ？

ああ!!？

もつとやる気出させてえ？

……もういいだろ。

まあそんな事はさておきだ……最近東横の調子がおかしい。いつもなら俺にべつたりとしてくるはずなのに、俺が大会から帰ってきた時からその回数が嘘のように減った。まるで何かを躊躇っているかの様な感じがした。

それにあの日から自分の事を姉と呼んでいたのに、何故かこれも私と元に戻っていた。

会話はいつも通りしてはいるはずなんだが……調子が狂う。この前の練習試合では、皆それぞれの戦績を収めてるって聞いてるし、悪いところはどこも無かったとも聞いている。

それ故に……気になって仕方がねえ。だが、無理矢理聞くのも違う。だから俺は、東横が言うまで待つつもりだ。それがいつになるか分からねえが……

(まあ耐え切れなくなったら聞くかもしれないが……)

こんな事を考えながら、日常を送っていた。どこか満足できないと思いつつもな

……

(それに、何故か東横は今週の1日だけだが部活を休んでるし……)

「いや……おかしいと言ったら、他の先輩方も何故か1日だけ休んでいた様な……」

まあなんかの偶然だろうな。

そして金曜日も終わって、土曜日になった。この日は大事な用がある。

それは……

『いよいよよ……いよいよこの日がやってきたア!!?』

麻雀世界大会がアメリカで

行われて1週間後のまさに今日!

ここ長野で初の試みが行われようとしている

ます!』

なんか司会のやつ……スゲエテンション高いんだが……

『今回の大会は世界麻雀協会が主催したのではなく、ジョースター選手自らが主催したものであり、また世界的に見ても世界トップ選手が開くのは初めての試みです。そんな初の試みの中!』

日本の長野で開かれるとは、私達日本の麻雀ファンにとっては

とても嬉しい事です!!?

では早速ですがジョースターさんにインタビューして

見ましよう!!?』

(えっ!!? まさかの最初にこっちにふられんのかよ!!?)

『ええ……では早速なのですが、今回何故ジョースターさんはこの地で開催しようと思つたのよでしょうか? ……あつ、に、日本語は大丈夫だったでしょうか?』

おい!!? そこ考えずに質問してきたのかよ!!? 全く……まあ誤魔化せるけどな?

へ日本で開催する事は前々から計画していたので、日本語で質問されても大丈夫です。また、何故日本で開催するのかについては、昨今の日本から輩出される雀士の方々が強いということもあつて……ですので、日本で麻雀している人と打つてみたいなどいう考えもありました。長野で開催する理由は、クジ引きで決めさせていただきました。

『お、おお! そうだったんですか!!? それにしても字も上手ですし、何より丁寧ですね。いつから日本語は学んでいたんですか?』

へ実は昔、日本で過ごしていた事もありません……その為にある程度の日本語はその時に学びました。丁寧な所は、努力したからと答えておきます。

『なるほど! そうだったんですね!!? まさかジョースターさんが日本で住んだことがあつたのは驚きです! はてさて、掴み部分の質問はこれで終わりにす

るとしまして、ここからは今回行われる麻雀についてお話を聞かせていただきたいなど

思っています！　　ジョースターさん、今回の大会は年齢や学歴は一切関係ないとの事ですが、その中からジョースターさんを将来的にも超える人物が現れるかもしれないとは思っていますか？』

へええ、そこは勿論思っています。あるいは、今日私を超える人も中にはいるとも考えています。ですがその前に、今回参加してくださいました方と純粹に楽しみたいという気持ちが強いです。最後まで勝ったからどうという訳ではなく、今回は純粹に楽しんでほしいです。』

『ジョースターさん、コメントありがとうございます！　　それでは、試合開始の時刻

も刻々と迫ってまいりました！　　早速ではありませんが、今回予選を勝ち抜いてきた

から選手達の対戦表を発表致します!!?』

大きなスクリーンに対戦表が出た。今回は元からある点数からのプラスが大きい順に評価していくという方式を取っている。このトーナメント……主催した俺も出る。まあ負けるつもりはないし、でもさっき伝えたように楽しむ事を優先するがな？

んでスクリーンを見ていたんだが……

(はあ!!?)　　加治木先輩に蒲原先輩……それに津山先輩に妹尾先輩まで!!?)

つうことは……)

俺は無意識のうちか、もう一人の名前も探していた。最近は何故か余所余所しいと感

じてしまう……あの子の名前を……

そして俺は見つけた……東横桃子の名前を……

選手は番号が振り分けられていて、それでこの卓か支持される。まあ、俺が鶴賀学園の麻雀部の人と当たるかは分からねえが……まあ自動的に振り分けられるからな。当たった時はいつも通りにやるさ。

そして試合は始まつ

ー試合は早くも最終戦へー

た……つてはやつ???

えつ???

いつの間にこんなに進んだよ???

おいさくs y『さあ!』

この大会もいよいよ終局になってまいりました!!?

ジョースターさん、今のお気持ちはどうですか?』し、司会者がここで俺に質問をふるだつ???

……おのれ作者めえ……

とりあえず司会の質問には答えよう……

へ私もここまで参加者の皆さんとは戦つてまいりましたが、プロアマ間は個性が抜きん出ている方も大勢いた様に感じます。その個性をこれからも磨いていつて欲しいです

『はい、ありがとうございます!!?』

ではここで、最終決戦に進出する選手を発表

致します!!?』

そしてスクリーンに選手の名前が表示された。今回は……まあ俺もいつのまにか試合に参加していた様で（何故か試合が始まったかと思ったら最終戦になっていたため……）俺の名前が呼ばれる。

まあ？ 主催者も大会に混じるってほとんどない様だから違和感がある。んでも、だからこそその試みな訳だが……

そして1人また1人と紹介された。その2人はどっちとも男で、少しヤが付いてしまいいそうな雰囲気はあった。まあ雰囲気だけな？ 　そして最後の1人は……

『最後の1人は……なんと高校生！ 　また試合の時は、相手は何故かその選手に振り込んでしまうという謎現象を引き起こした今大会のダークホース！ 　鶴賀学園1

年！ 　東横桃子!!?』

……ここまで勝ち残ってきたんだな……。あの大会以来、素っ気ない態度されて悩んでいた。でもこの場で……この場でなら、それを知ることできるかもしれない。これはただの勘だ。

それに俺の正体も東横には知らせてない……ましてや誰にも分かってないだろう……

（でも俺は……いつも通りの麻雀をして……この大会に参加してくれた東横を楽しませ

てやる！)

「もう大会を開いた主旨とは随分離れた感じはする。だが俺はこれでいいと思う。なにせ試みだ。ダメだったらまた考え直したら良いだけだ。だから……」

「この試合……全力で楽しんでやるぜ」

誰にも聞こえない口調でそう呟き、俺は卓に着いた。

s i d e

東横

いよいよこの大会もここまで来たつす。最初はただ……あの人が星条くんかを確かめるものだった。でもやっているうちに楽しくて……そうしたらいつのまにか相手が勝手に私に振り込んでくれたり、相手から見逃しもされた。いつも麻雀部で出てくるそ

の能力が出ていたっす。

こんな初対面の人達の前だと、緊張して能力が出るまでに時間がかかるはずだったんですけど……あの人と打ちたいと思っただけで、試合が始まってすぐに能力が発動していたっす。私と打った人達は、私に振り込むたびに驚いていた。

その結果として、決勝まで登ったっす。そこには、予選で打ったことのない男の人2人と……

(この人が……ジョースターさん……)

テレビ越しでは感じられない迫力が感じられたっす。でも……

(それと同時に……落ち着いている私がいる……)

これは……星条くんと打ってる時と同じ感じ……

その感じを感じながらジョースターさんを目に映した。その時に、一瞬だけっすけど……星条くんがそこに立っている気がした。

でもずっと見ているわけにもいかななくて、ジョースターさんもこちらを見てきたからさつと目をそらしたっす。グラスンをしていたっすけど……私はこの体質だから人の視線にも少し敏感なところがあるっす。

今は多分、この場にいる人達に私の姿は見えていると思うっすけど、もう少し時間が経ったら見えなくなると思うっすね。

そして試合は始まったつす。最初は丸井さんという方で、席順は東から丸井さん、私、秋口さん、ジョースターさんとなつたつす。

そして今は秋口さんの8巡目で、索子の2を切つてリーチしてきた。秋口さんの捨て牌率を見ると、見るからに索子が多かった。でも所々に出してない部分もあったので、そこも注意しながら打つ。

次はジョースターさんの番で、山から牌を取る。そして迷うそぶりを見せず、それに加えて手牌から牌を捨てた。どうやらそれは安牌の様つすね。丁度いらぬ牌があるので、次はそれを捨てることにするつす。

それから何巡目かで丸井さんが秋口さんに振り込んだ。安い手ではあつたつすけど、親が私に流れてきた。そしてここからは……

(ここからは……ステルスモモの独壇場つすよ!)

丸井さんと秋口さんには、この状態になった私を認識することはもうできないと思つすけど……問題は……

(ジョースターさんがもし、星条くんと同じくこの状態の私を認識する事が可能なら……)

少し複雑つすね……私を認識できる人が親や星条くん以外で普通に認識できるとなると……

そう考えると何故か悲しい。この私の能力は特別だと思っていた。高校生になるまで、私を認識できる人はいなかった。親でさえ……私の事を認識しづらくなった。

そんな中……星条くんと出逢った。私の事を認識できる人に……それから私の日常は変わった。親とも昔の様に楽しく接する事ができた。そして私の隣には……いつもとは言わないけど星条くんがいた。星条くんといると……いつも楽しく嬉しくて……そして……

(あつ……私……星条くんの事が好きなんだ……)

今気付いた……私は出逢った時から星条くんのあの笑顔に救われて、そして接しているうちに好きになっていったんだ。だから、星条くんに会えなかったあの日も寂しかったんだと思う。

(でも結局はこれも私よがり依存になるのかな……)

だけど今はそれを考える前に、この大会を楽しもう。そして……ジョースターさんが星条くんのかどうなのかを確かめるっす！

そのために……

「ロン！ 8000っす！」

「ツモ！ 3900オール！」

「ロン！ 5800っす!!？」

「この試合……全力で楽しむっすよお!!？」

そして私の4本場になろうとした時……

「イカサマだ!」

そんな声が会場に響いた。それを発したのは秋口さんだった。

「さつきからリーチかけてる様だけど、こっちはそんな宣言全く聞こえてないんだよ!」

「そ、そんな……私はちゃんと!」

「嘘をつくな!」 なら丸井さんにも聞いてみようじゃねえか!

丸井さん!

あんたにはこの子のリーチ宣言が聞こえたか?!

「えっ?」 そ、そうですね……僕にも聞こえてなかったんだけど……」

「ほら見ろ!」 丸井さんにも聞こえてねえみたいじゃないか! この卓で2人

も聞こえないんだったら、そんなのイカサマに違いない!」

秋口さんの視線が……私には怖く見えた。そして……会場で見ている人達も私に視

線が集まって……それも怖く思えてきた。

怖い……怖い怖い怖い怖い……

(助けて……)

私は……依存しているかもしれない……でもその時は……心の中で助けを求めろしかなかった。あの人に……太陽の様な笑顔を向けてくれるあの人に……

(助けて……星条くん……)

涙が私の頬を伝った時だった。

「……………ねえ」

（……………えっ?）

その声は……………私が今一番聞きたい人の声だった。でもどこから? 周りを見渡

しても、それらしき人はいない。いや、そもそも星条くんは私よりも麻雀が好きで強い……………なら、この大会に出ているもおかしくないはず……………なのにこの大会では見かけなかった。それにあのスクリーンにも映っていないかった。なら……………どこから聞こえたんだらう?」

「観客にだって聞こえてねえはずだ! それがこの反応だらう!?!」

「……………じゃねえ」

（また……………聞こえた……………）

「こんな試合! ジョースターさんに恥ずかしいとは「ふざけんじゃねえ!!?」っ?!」

「その子はさつきからリーチをかけていた時、ちゃんと宣言していたぞ。それは中継でも取られているはずだ。お前達に聞こえてないのは……………ただ単にその子の声を聞こうとしてねえからじゃねえか?」

それを言ったのは、ジョースターさんだった。でも、そんな事よりも……………

『じよ、ジョースター選手が喋ったあ!!?』

いや違うつすよ!!? そんな事よりもっと驚く事があつたつす……

「それでテメエ……確か秋口つて言つたか?」

「あつ……は、はい……そうですが……」

「テメエ……その子の事をイカサマと言つたよなあ?」

ちゃんとリーチ宣言したその子にイカサマつったよなあ?」

「で、でも俺には全く聞こえては「つべこべ言つてんじゃねえ!」 そんなこと言うんだつたら、俺を含めた現役のプロや高校生で有名な人で強い奴らは皆そんなんばつかだぞ。その人達にもイカサマとテメエは言うのか?」 い、いえ……そんな事は……」

「ほう……なら、現役でプロの人達や高校生で誰もが知つていら様な選手にはイカサマと言わず、この子にはイカサマと言うんだな?」 ルールに則つてちゃんと、そして楽しみながら打つているこの子には言うんだな?」

それを聞いていた秋口さんはとても震えていた。途轍もなく震えていて、さつきまでの態度は消えていた。

「それに……テメエはこの子を傷つけた。俺はそれが許せねえ。だから……」

ジョースターさんがきていた服を脱ぎ去つた。正確に言えば、上着を脱ぎ去つていたつすが……問題なのはそこじゃないつす。脱ぎ去つたその後……そこには……

「次の局……俺はテメエを飛ばしてやるよ!!？」

秋口さんに対してハコ宣言をする星条くんがいたつす！

s i d e o u t

俺は……東横がイカサマと言われるのが我慢ならなかった。彼女が傷付いてしまうのが我慢ならなかった。

だから俺は、この場で正体を明かした。4年間……誰もがずっと俺の素性を知らないでいた。頭には……マナー違反ではあるが帽子を付けていた。そしてグラサンもかけ

て、口はつぐんで喋らない様にしていた。これは、俺をプロデューズしている人に対してもその態度を取っていた。

俺がいくら非難されても馬鹿にされても……怒るなんて事はしなかった。それで自分の素性がバレるのが怖かったからじゃない。ただ起る理由が無かったからだ。

俺が非難されるのは……それを言う人達にとつてはそう見えただろうから。俺が馬鹿にされるのは……この格好や態度が非常識に見えただろうから……とかそんな風に考えていた。

だが俺は……我慢ならなかった。俺以外の……しかも純粹に麻雀を打って楽しんでる彼女に対してイカサマと言われたのが我慢ならなかった。そして……東横が傷つくのが我慢ならなかった。

だから俺は……今この場で……テレビでも生放送されているであろうこの場で姿を晒した。

こちらら、この姿を隠していたのは……メディア関連が面倒臭かったからだ。嗅ぎ回られるのは好きじゃないし……でも俺は……それよりも目の前で、俺にとつての大切な人が傷つく方がよっぽど見たくなかった。

それに、東横が助けを求めている気がしたんだ。だから、俺がここにいて安心させてやらねえとな？

後は……東横をイカサマ呼ばわりしたあの秋口って奴を叩

きのめすだけだ！

「さあ………続きをやるうか？　それで最初に言つとく………俺が上がる時は、あんたが箱になる時だ」

その言葉でこの場は不穏な空気になる事は分かったが………いまの俺にそんな事は関係ねえ！　ただ、東横を侮辱した奴を叩きのめす事しか考えてはいなかった。

そして東横が親の2局4本場が始まった。自動卓から牌がせり上がってくる。

それで俺の手牌………萬子索子筒子字牌がバランス良く揃っていた。ただ………これは九種九牌でこの場を流すこともできる。だが俺はそんな事はしない。何故なら………これは俺が望んだ手だからだ。

そして俺の番………俺が1番初めにこの牌を加えるか加えないかで俺の作る役は決まる。

それを引いた承悟の空気が変わった。少しだが、承悟の周りが光った気がした。しかしそれは、この場にいる殆どの人が気付いてはいない。ただ………東横だけはそれに薄っすらと気付いていた。あの………最初の日に承悟に出逢った時の笑顔と一緒の輝きだと………

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e

↓

1
2 話

迷惑なんかじゃあねえ
!!?

俺の目の前で……東横がイカサマ呼ばわりされた。

東

俺の目の前で……東横が傷ついた。

白

東横が俺に助けを求めている様な気がした。

中

そして俺は……目の前で東横がそんな悲しそうで辛そうな表情をしているのが……

中

許せなかった。

筒子1

だから俺は……

萬子9

(俺は東横を傷つけた奴を許さねえ……絶対にだ!!?)

索子9

俺がこれを引いて手牌からいらぬ牌を捨てた後、懐からバンダナを取り出しておでこに括り付ける。それを見ていた他の卓の連中もその動作に緊張を露わにしていた。にしても……

(この感覚……あの時以来だ。何もわからず純粹に打っていた……あの子供時代の時

と)

役なんて正直分からなかった。ただ……同じ奴とかを揃えればそれで良いって思いながら打ってた。その子供時代の感覚が蘇るかの様に……今の俺は、秋口って奴をぶちのめすと思うと同時に楽しいと思える。

(俺の手牌は揃った。後は待つだけだ)

星条は静かに待つ……相手が牌をきるのを……

s i d e 東横

星条くんの正面に座っていた。その場で真剣な表情で打つ星条くんの姿に……私は魅力された。確かにいつも真剣には打っていると思うっす。

でも今回は……いつもと同じ様に真剣に打っている感じはするのに、彼の顔を見ると笑っていた。それも、私が初めて会った時と同じ様な太陽の様な輝きを持つ笑みだった。いつもの様な悪巧みをする笑みじゃない。

そんな顔を見てしまったら……見てしまったから……

トクン……

「んっ……」

つい声が漏れてしまった。他の人にはかろうじて聞こえてはないと思うっすけど……

(か、身体が熱い……)

今の星条くんを見ると……何故かはわからないけど身体が熱い。できれば身悶えたっすけど……ここでは我慢する。他の人には見えてはいないと思うっすけど……カメラの方には写つてると思うっす。それに……

(正面の星条くんにも……見られてると思うし……)

星条くんに見られること自体……嫌じゃない。ただ……身悶える姿の私を見られた

くない……今はそう思ってしまう。

でもそれと同時に、今の笑みを浮かべた彼を見ると元気になってくる。さつきまでの嫌な気持ちも段々無くなって、明るい気持ちになった。だからか分からないんですけど……牌を切る時がとても軽い。それで……今打っているこの瞬間がとても楽しい！

(これも……星条くんの笑顔の影響っすかね?)

本当に……彼には助けられてばかりだ。彼がいたから、私は高校生活は毎日楽しいし退屈じゃない。それに、こんなに人が多い場にも出ることができた。

そして、今私は目の前で彼と……星条くんと一緒に打ってる。いつもの様に……楽しいと思いつながら打つことができている。

星条くんはさつき、次で終わらせると言っていた。その発言は、私のために言ってくれたこと自体とても嬉しい。でも……

(私は……この楽しい時間を終わらせたくない!!? だから!!?)

「リーチ!!?」

私は……もつと貴方と打っていたい!!?

東横がリーチをかける。他の奴には見えてないかもしれない。だが俺はしつかり見えている。東横がさつきの様な不安な顔じゃなくて、笑った顔でいつもの様に打っている事を……

それでここに来てリーチをかけて来た。でかい手なのは間違い無い。でも俺も……ここまで来て引くわけがない!!?

東横が捨てた牌を見ると、どの牌も満遍なく捨てられていて分からない。だが……

(粗方の予想はついた。多分東横が待っている牌は……)

俺の予想が正しければ……

承悟がそう思っていた矢先……承悟の次にツモを切る秋口が山から一つ牌を取る。しかしその取った牌が悪かったのか顔をしかめる。そしてそのまま手牌に加えず捨て牌にした。その瞬間……

「ロン!!?」

その場に2人の声がその場に響いた。1人はリーチをかけていた東横だった。秋口が捨てた牌は筒子の9……その捨て牌で出来た東横の役は……

「リーチ、一発、清一色……倍満で16000つす」

「な……なっ!!?」

『おおっと!!? 東横選手のロンが決まったあ!!?筒子のみの清一色! 鮮やかな手並み!!? そしてもう1人ロンした人は……』

「俺だぜ」

承悟は自分の手牌の両側を持って前に倒した。その結果は……

「国士無双……32000点だ」

『こ、国士無双だあっ!!? なんと今大会初の役満だー!!?』

全く……司会者のテンションが下がる気配がない……こっちが脱帽するくらいだ。それで……ここで点数計算してみようか。

秋口って奴は……まあそこまで点数はないだろうな。あんなにばかすか取られたんだ。その証拠に意気消沈してやがるし……

まあ? 自業自得だ。東横をイカサマ呼ばわりしたんだ。これぐらいで済ん

だ事をありがたく思っただけで済むくらいだ。

丸井って奴の方は……特に何もしてねえしお咎めは無しだ。でもロンする時は普通にロンさせてもらうがな? それよりも……

(東横……なんて楽しそうに打ってやがるんだ)

確かこれで東横が親の4本場だったか……8本場まで行くと強制でその親が勝つてルールがあつたと思うが……

(それで勝ち越されるのもこつちとしちゃ面白くねえな……楽しく打つてくれるのは何よりだが、こちとらプライドは持つてる。早々に親を流させてもらうぜ?)

4本場が始まった俺の手牌……これって本当に機械がランダムで配つたのか?

何せ白・撥・中が2つずつ揃ってやがるし……まあここはあまりでかい手を狙わずに親を流すか。まあ小三元にはするが?

結果的に俺は10巡目に行かないくらいで小三元で上がった。4巡目ではもう白と撥が3つ揃つちまったからな……だから後は適当にした。そこでドラも2つのおつて子の6翻……跳満の12000を搔つ攫う。因みに東横からだがな?

本人の顔を見ればとても悔しそうにしていたが……それでも戦意喪失はしちやいなかった。いやあ……本当に今が面白い!

(ただ……昔から家族とこんな風に打ちたたつていうのは……我儘な事かな……)

一瞬そんな事を思いながら、今を全力で楽しむために俺は丸井の親を安手で流した。

そして俺の親……俺の手牌は索子中心だ。つて……これは……

(俺はもう何で和了るか決まったぜ……さて、東横はどうする?)

いつものような悪巧みの笑顔を浮かべながら承悟は東横を見た。東横は承悟の視線に気付いたようで、臨むところだと言った意味合いで視線を返した。

それから場は進んでいった。承悟は索子以外を捨てながらも1つある牌を待ち、東横は東横で全ての種類を満遍なく捨てて行く。しかしながら傾向としては真ん中の牌が多かった。そんな時……

(げっ……これは中々に危ない牌だぜ……)

承悟が手にしたのは筒子の9……その牌は、未だに捨て牌の場には無かった。

(ええい! ままよ!!?)

承悟は筒子の9を捨てた。それを見計らってか……

「ポン!」

東横がそれでポンをした。そして捨てたのは撥だった。

(……東横の奴分かってやがるな)

俺の手元には……撥は1つだけ。後もう1つ来てくれればなあ……と思つてた時

「ろ、ロンです! 四暗刻の役満で32000です!!?」

丸井って奴がその撥で四暗刻を決めた。それで俺の親も流れてそのまま試合は終了

……会場は拍手に包まれたが、俺は何とも打ち足りなかった。

(でも……東横な様子がいっつも様に戻ってよかったぜ)

終わった後はその事ばかり考えていて、その後司会者に何を問われて何を答えたか覚えては無い。その状態で楽屋に戻ったんだが……不意にドアがノックされた。それに応えると、スタッフさんが入って来て、俺にお客さんですと言ってきた。誰だろうかと思つてたら……

「ほ、星条くん……」

「東横……」

俺としては全くの予想外だった。まさか東横が俺のところに来るとは……だってここ高校じゃあねえしさ？　でも何の用なんだろうな？　世間話……？

でも別に構いやしねえが……

「星条くん……その……私が来て迷惑じゃあ……無いっすかね？」

……ん？　なんだって？

「と、東横？　そのお……なんだ。確かにいきなり来られて驚いているのもあるんだがな……そのせいかさつきなんて言ったのかよく分からなかったんだ。だから……もう一回言ってくれないか？」

「わ、私が来て……その……星条くんは迷惑じゃ無いっすか？」

「は？　　迷惑な訳ねえだろ？　　なんだいきなり？」

「その……私のせいで、星条くんにさっきの大会で迷惑かけてしまったつすし、それに……私星条くんの事考えずにいつも自分勝手に振舞つてたかなって……」

そう語っていた東横は……泣きそうな顔をしていた。俺はまた、いつのまにか東横に辛い思いをさせてしまっていたようだ。だけど理由が分からない……情けない話、今回は思い当たる節が無い。

（いや……ただ俺が見落としているだけかもしれないねえ）

でも、考えても考えても分からねえ……俺は一体東横に何しちまったんだ？

（ただ……様子がおかしくなったのは今週からだよね？　　とすると、何かあったの

は先週の金曜日から今週の日曜日にかけての3日間の間？　　俺がアメリカに

行つてる間に何かあったつて事になる……）

「東横……良かったら良い。そう言ってしまう訳を話して欲しい」

「……私、星条くんがアメリカに行つてから、ずっと寂しかったつす」

「授業中も全く手が入らなくて……練習試合の時はいつもの様な調子でいけたのに、その後は全く違つて……それで何でなのか考えたつす。そしたらつすね……」

「私……星条くんが傍にいないとダメだつて……星条くんが私の隣にいないのが寂しいつて……そう考えついでしまつたんつすよ」

「そこからまた深く考えた。そう思ってしまったのは何故だろうって？
分かったんすよ。私は……」

それで

「私は……星条承悟くん……貴方の事が好きだって……大好きだって」

そう……だったのか。東横は……俺の事が好きだったのか。しかも友人ではなく異性として……

「でも……それと同時にこうも思った。相手の事が好きなら……相手の事も深く考えなくちゃって。それで私は……星条くんに依存してるんじゃないかって思った」

「依存？」

「そうっすよ……そう考えたら、いつも星条くんに対して姉の様に接している私が気持ち悪い存在に思えたんすよ」

……だから最近、妙に様子がおかしかったのかよ……

「そう思ったから私……星条くんに聞きたい。私は……星条くんにとって迷惑じゃ無いですかね？」

私……」

さっきの試合とは違って……いや、心の中では不安だったんだろう。それに……俺は気付けなかった。だからそれについては、俺は東横に謝りたい。でも……それよりも前に東横に言いたい事がある!

「いの……」

「……?」

「このっ……馬鹿野郎!!?」

「っ!!?」

ほ……しじょうくん?」

俺は……初めて女の子に馬鹿野郎って言った。女の子に対して汚い言葉は……出来る限り使わない様にしていただけだな。だけど、今回は使わざるを得ない。いや……使わないと俺の想いが届かないと思ったんだ。

この……今俺の身体の中を巡り巡ってるこの熱い想いを……東横に知って欲しい。分かって欲しい。それで俺も言っつてやるんだ!!? ……まあ抱きしめてしまっただのは勢いだけだな?

「俺が……俺がいつ東横の事を迷惑つつつたよ!!?」

迷惑だったならこちとら最初

から相手してねえんだよ!

俺はな?

俺は……お前がいつも一緒にいて

くれて助かってんだよ」

「私が……一緒にいて?」

「そうだよ！ 彼の誰でも無い！ 東横、お前がいつも傍で笑ってくれる

から……俺はいつも孤独じゃあねえんだよ。昔みたいによ……誰もいない寂しい所で泣く事なんてもうない！

その後悲嘆に暮れることもない!!?

俺は

……東横に救われてんだよ」

「……本当に？」

「当然だろうが……！ だから……東横が俺の事を好いてるって言われて嬉し

いんだよ。んで……俺も東横……お前の事が好きだ。だから、俺にどれだけ依存したって構わねえ！

？ それに俺……東横なああの姉キャラな……気に入ってた。だから……毎日

よ……ああ振舞ってくれねえと……困る。だから……だからよ……自分の事迷惑だなんて……もう言うんじゃねえぞ……？」

「うん……うん！ 私……うん……お姉ちゃんはもう、そんなこと言わないっ

すよ。そしてこれからも……星条くんの事好きでい続けるから」

その日、星条と東横は恋人同士となる。

13話

とのデート

R-15

東横

髪型は……ああ、いつもと変わらない。というか寝ても覚めても、挙げ句の果てに風

呂に入って乾かした後もこうだ。

ともかくとして髪型は問題ない。次に服装は……Gパンに深緑の半袖の上から赤色で袖のない薄地のカーディガンだ。

ああ？　　何で服装とかを気にしてるかだと？

まあそうだな……

今日は……

「待ち合わせ時間には……15分前だな」

俺は都市部に來ていた。都会ほどではないが……ここも長野でいえば発展してる都

市だ。

そして俺は、駅前にある噴水広場にあるベンチで読書をしながら待っていた。その本の題名は、『自分のやる気スイッチを入れる10の方法』という奴だ。これが案外面白い。

つと、そんなこんなで待ち人が来たぞ。

「承悟く〜ん！ お待たせつす〜♪ 待ったつすか？」

「ん？ いや、こつちも来たばかりだぜ！ じゃあ早速行こうか!!？」

そう、何を隠そう今日この日は……

東横とデートの日なのだから!!?

「承悟くん、まずどこに行くっすか？」

「そうだな……先ずは服でも見に行こうぜ」

つてな訳で最初に来たのは全国的にチェーン店として展開しているユ○クロだ。因みに今の東横の服装についてだが、黒いシャツの上から長袖で薄いカーディガンで、正面を2つのボタンで留めている。そして黒いズボンを履いていた。タイプとしては、脚のラインが出るようなものだった。

ここで俺の東横に対する評価を合わせてもらおう。実に……実に俺好みで素晴らしい!!? 東横は、どちらかというと基本色は白でスカートといったような少し大

人の様な感じのお姉さん風、つてな感じのファッションが似合うと思うが……個人的には俺、女性が履くのはスカートよりもズボン＆パンツ系なんだよな!!?

それが

ロング丈かショート丈かは別として……

ともかく俺は今の東横の服装は気に入っている。

それでさつき東横に今日の服装の事を褒めたら、凄く嬉しそうにしていた。俺に会うまでは……やはりというか自分の体質上、大勢の人がいる中でも認知されずに過ごして来た事もあって、自分の服装でどうこう言われた事はなかった様だから、それも相まって俺から褒められた事が嬉しかった様だ。

よし、今度からどんどん褒めていこう!

……て話があつたのはいいんだけどさ……今俺的にかなりマズイ状況にある。何かって？　知りたいか？　ほんとに知りたいか？　ホントのホント

だな!!?

ならもうここからは後戻りできないぞ!!?

何がマズイかって……それは俺達が今いる場所だ。それも男子が立ち入ったらマズイ所だ。それは……

「承悟くん！

これなんすけど……私に似合うっすかね？」

（女性専門の下着売り場！

ランジェリーショップだよお!!？）

lingerie shop……何故英語に態々直したか疑問だが、俺はユニクロで俺の分と東横の分を何着か見繕った後、東横がそのお礼にある所に連れていきたいと言いだめたのがきっかけだった。

その時の俺は……東横がユニクロで俺の好みは別として物凄いファッションセンスを披露してくれた事もあって正に眼福物だった。つまり何が言いたいかって？

最高にハイツて奴だあ!!?

もう最高だね!!?

てな感じでテンション

MAXだった事もあり、東横がどこに連れていこうとしているのか全く気にはならなかったんだが……

(ま、まさか男子である俺をこんな所に連れてくるとはっ……)

「承悟くん、どうっすか？」

そして目の前には……着替えスペースに入っている東横が下着しか着てない状態に、自分の下着姿はどうかと聞いてきた。因みに色は黒だ。

「そ、その……」

「その？」

「……に、似合ってるし……と、東横に凄く合ってる……」

「っ！ て、照れるっすねー!!? / /」

「っ!!?」

俺のその一言で、東横が顔を赤くしながらデレた……

(「敢えて言おう!!?」
眼福であると!!?)

もうその一言に限る!!?

そんなこんなでランジェリーショップから出た俺達は、そこから昼食食べたり映画を見たりゲーセンに行つて遊んだり、デートを満喫した。今はその帰り道だ。

「承悟くん、今日はとても楽しかったすね!」

「そうだな！　俺……凄く楽しかった。誰かと一緒に……それも、俺の好きな人と一緒にこうして遊びに行くなんて無かったからよ。だから……凄く楽しかった」

「っ!?」　　そ、その笑顔は反則つすよ……／＼／＼

東横がまたデレる。笑顔になった自覚はない。自覚はないが……自然と出てたんだろうな。

「承悟くん……その……これはお願いなんすけどね……」

「ん？」　　どうしたんだ？」

「その……お姉ちゃんね……まだ承悟くんと離れたくなくて……だからその……承悟くんの家に行っても……良い？」

「グハッ!?」

俺は東横のその言葉で精神ダメージを負っていた。だって口をグーで隠しながら上目遣い＋モジモジしながら言ってきたんだぞ？　これでダメージ負わん方がおかしいわ!!?

「だ、大丈夫つすか承悟くん!?」

俺に精神ダメージを負わせた本人は全く自覚はなく、ただいきなり口から血を少量吐いた俺の事を気遣っていた。

「あ、ああ大丈夫だ」

俺は何事も無かったかのように振る舞い、東横の手を握る。

「っ!!? / / /」

「さて、じゃあ帰るか。俺の家にな?」

「っ! うん!!?」

そして何事も無かったかのように自然に東横の手を握って帰り道を歩いた。

そんでやつとこさ家に帰ってきた。勿論東横を連れてだが?

「今日は少し暑かったし喉乾いたなあ……。俺お茶用意してくるからよ。だから東横は部屋で寛いでてくれ」

俺の部屋に東横を招き入れた後は、台所に行ってお茶の用意をする。そしてまた自分

の部屋に戻って東横に振る舞う。まあ簡単なおもてなしといった所だ。

それで今はどうと……

「ふふ……承悟くんは相変わらずお姉ちゃんの膝枕が好きっすね♡」

「し、仕方ないだろ……東横の太ももが柔らかいのが悪いんだ……」

「承悟くんからそう言われるのは、お姉ちゃんとても嬉しいっす!!?」

ふ、プラスに受け止めるとは……

「それに……」

「ん? うわっ!??」

急だったもんだから俺も情けない声をあげちゃった。さつきまで後頭部にあった東横の心地よい膝枕の感覚が、いつの間にかベットの敷布団の感覚になっていた。相変わらず東横の顔は正面にある事はあるんだが……一体どうなった?

そう考えていると、俺の体は急に温かく優しく包み込まれた。そしてやつと状況を理解した。東横が俺に抱きついていたんだ。

「承悟くんとして身体を密着しているの……とても良い気持ちなんすよ。心がポカポカする様な……この感覚がお姉ちゃんは大好きっす♡」

柔らかい感触が身体全体を襲う。特にお腹のあたりとか……

「ねえ……お姉ちゃんとキス……しよ?」

「っ!? う、うん……」

今日何度目だろうか?

東横の上目遣いにやられてしまうのは……

そして俺は……東横の柔らかい唇と俺の唇が触れ合った。それだけにとどまらず、その後は啄ばむ様なキスにまで発展して……俺は終始顔が赤いままだった事は覚えてい

14話 ありふれたこの時間が……

東横とデートをした翌日は普通の登校日だった事もあり、日常としては今のところ変わりを感じられない。

まあ……変わった事としたら、あれ以降さらに東横がべったりとしてくるぐらいで、授業中も誰にもバレない程度でコツソリイチャイチャしたり、部活中も先輩方の目は気にせず俺にスキンシップを取ってくる。

しかしながら……悪くはない。両親と別れて以降ポツカリと空いた穴が、それで塞がれていくかのよう。

そんな日常も何週間か過ぎ去り、いよいよ今日……

「皆集まってくれ。いよいよ来週の土日には予選を含めた県大会が始まる。私達3年は今年が最後の大会となる。今までは個人戦にしか出れなかったものの、星条くん達が入部してくれたおかげで参加資格も満たせた。まずはお礼を言いたい」

「そんな事は良いですよ部長。それに俺だって、先輩方の最後になるかもしれない大会

に付き添えるとあれば光栄ですし」

「そうつすよ。まあ私は星条くんが行くところにはどこにでもついて行きたいつすし、最終的に加治木部長のお供を星条くんがするのなら、私もついて行くつすよ」

「わ、私はあまり力にならないかもしれないですけど……そ、それでも頑張ります!!?」
「ありがとう。思いはどうあれ、私達に付き合ってもらった事を……私は誇らしく思うよ」

「それはそれとしてだ。星条くん……」

「ん? 何ですか部長?」

「私は君が入部した時から何回も繰り返している事なのだが……私が部長ではないと何回言ったら気が済むんだ!!?」

「えっ? いや、どうみたって部長でしょ? 今の立ち位置は、俺から見てもそう値する所だと感じますし?」

「わはは、星条くん、私が部長だよ?」

「いや、浦原先輩じゃなくて加治木先輩が部長ですつて。良い加減現実を見て下さいよ先輩」

「君が1番現実を見るべきだが?」

「まあまあ、そんな軽めの漫才じみた事はどうでも良いとして。今回の県大会について

ですよ？」

（（あつ、話を逸らした））

「……ああ。そうだ。とりあえず団体戦では誰が何番目に出てやるのかを決めたい。とりあえず私の考えなのだが……」

そうやって決まっていくな選だが、俺はというと……

「へえ、俺は仮に最終戦行つた時の大将ですか」

「ああ。まあ出たい時に私の代わりに出ても勿論構わないし、その許可も取つてあるからな。それに……」

「君がこの鶴賀学園の生徒だと知つた時の他の者の反応も見てみたい事だしな」

「いやあ……部長も案外悪いお方ですねえ」

「そうでもないぞ。これまで4年間素性が分からなかつた選手が、まさか今年高校1年生になつていたというのを隠し通していた君ほどでもないさ」

「ええ？　　そうですか？」

「そうだよ。実際君だと知つたときは驚きを隠せなかつたからな」

「……まあそうやって今までの関係が全部他人行儀になるんじゃないかって思つてたから隠してたんですがね。まっ、そもそもあの放送日本でしかやっていなかった様なので、一応各国で流すのならば俺の正体は上手く隠す様にも言いましたが、実際にその場

にいた人達やあの放送を見た人にはバレたでしょう」

「それでも……俺の正体を知ってからも先輩方は変わらずに接してくれましたし。だから感謝なら俺だつてしてるんですよ」

「そうか。それだつたら私の事を部長とかつて言うのもやめてもらいたいんだが……」

「いや、そもそも……まあ良いです。ともかくとして、俺が入ったからには最低でも全国狙わせて頂きますよ」

「ああ、頼りにしているよ屋条くん」

それからはまた卓を囲って牌を打つていく。取り敢えず予選に出る前に今よりも強くしとかなないとな。

その活動も今日は終わりを告げ、今は東横と並んで帰り道を歩いていた。それも恋人繋ぎしながらな。

「ふふつ、今日も承悟くんカッコよかつたすよ♡」

「俺はいつもの通りに打つただけなんだがな……でもまつ、東横に褒められるのは嬉しいけどな」

東横に笑みを浮かべながら俺はそう答える。それに対して東横も、俺の腕に身体ごと密着して応えた。

「そういえば承悟くん、承悟くんはお姉ちゃんの事をいつ名前読んでくれるんすか？」

「……………えっ?」

「だって、お姉ちゃんだけ承悟くんの事を下の名前で呼ぶのはフェアじゃないと思うだ。だからお姉ちゃんの事も……………下の名前で呼んで?」

つと、また上目遣いしながらそう言ってくるもんだから……………俺は断れない。

(そもそも断るつもりもないし……………)

「……………確かにそうだよな。もう俺達付き合ってるし……………俺も姉ちゃんの事名前で呼ばないとな?」

「そうっすよ。だからお姉ちゃんのこと……………今から名前で呼んでみて?」

「あ、ああ……………呼ぶぞ。……………も、桃子」

「はい♡ 良くできました。そのご褒美として……………承悟くん、目を閉じて下さいっす」

俺は、東横……………いや、桃子が何をするかを何となく理解して目を閉じた。それから数秒後……………俺の唇に柔らかくて温かい感触のものが押し付けられた。

「はい、もう目を開けて大丈夫っすよ」

目を開くと、少し頬を赤く染めながら笑みを浮かべる桃子がいた。

「……………かわいい」

「えっ? どうしたっすか?」

「いや……………俺そんな桃子の、お姉ちゃんの様子を見たらなんか歯止めが効かなくなっ

きてるみたいでさ……だから」

「ふふっ、分かったっす。じゃあ続きは承悟くんのおうちで……良いっすね？」

「ああ。じゃあ早く帰るか。お姉ちゃん、俺の背に乗ってくれ。お姉ちゃんの事おんぶして走って帰るから」

「だ、大丈夫っすか？」

「心配する事ないさ。伊達に身体鍛えちやいねえからな。さっ、乗ってくれ」

「分かった。それじゃあ、お願いするっすよ」

桃子を背中に乗せ、桃子の両手が俺の肩をしっかりと掴んだのを確認すると、あまり負担にならないくらい速度でその帰り道を駆けて行った。

(にしても……)

何が……とは言わないが、背中に当たっているこの感触って……いや、何を今更な事考えているのやら。

と、取り敢えず俺は頭の中で煩惱退散という単語を繰り返しながら駆けて行った事は想像にたやすい事だろう。

(ああ……これが承悟くんの背中♡)

私は承悟くんの身体の大きさを改めて肌で感じていた。私の身体が余裕ですつぽりと入る大きさだと思うっす。

(でもこれだけ身体が大きいのに、私に甘えてくるあの姿……これが正にギャップ萌えってやつっすね)

そう思っている今でも、彼は頼もしい足取りで帰路を走っている。それも私に出来るだけ負担をかけまいとしながら……

(ふふっ♡ 本当に承悟くんは優しい)

そう思った私は、承悟くんを背後から抱きしめる様な形で私の身体を背中に預ける。

「ふあっ♡？」

そうしていると、承悟くんから可愛い反応が……

(もつとそんな可愛い反応が見たいなあ♡)

私はそれから承悟くんの背中から様々な悪戯を仕掛けては、承悟くんの反応を楽しんだ。後で怒られるのは想像に容易いつすけど……でもこの時間が、承悟くんと一緒に

いられるありふれたこの時間が……私は好き。

s
i
d
e

o
u
t